

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18



八江菽名所畵  
一

ル 4  
303  
1

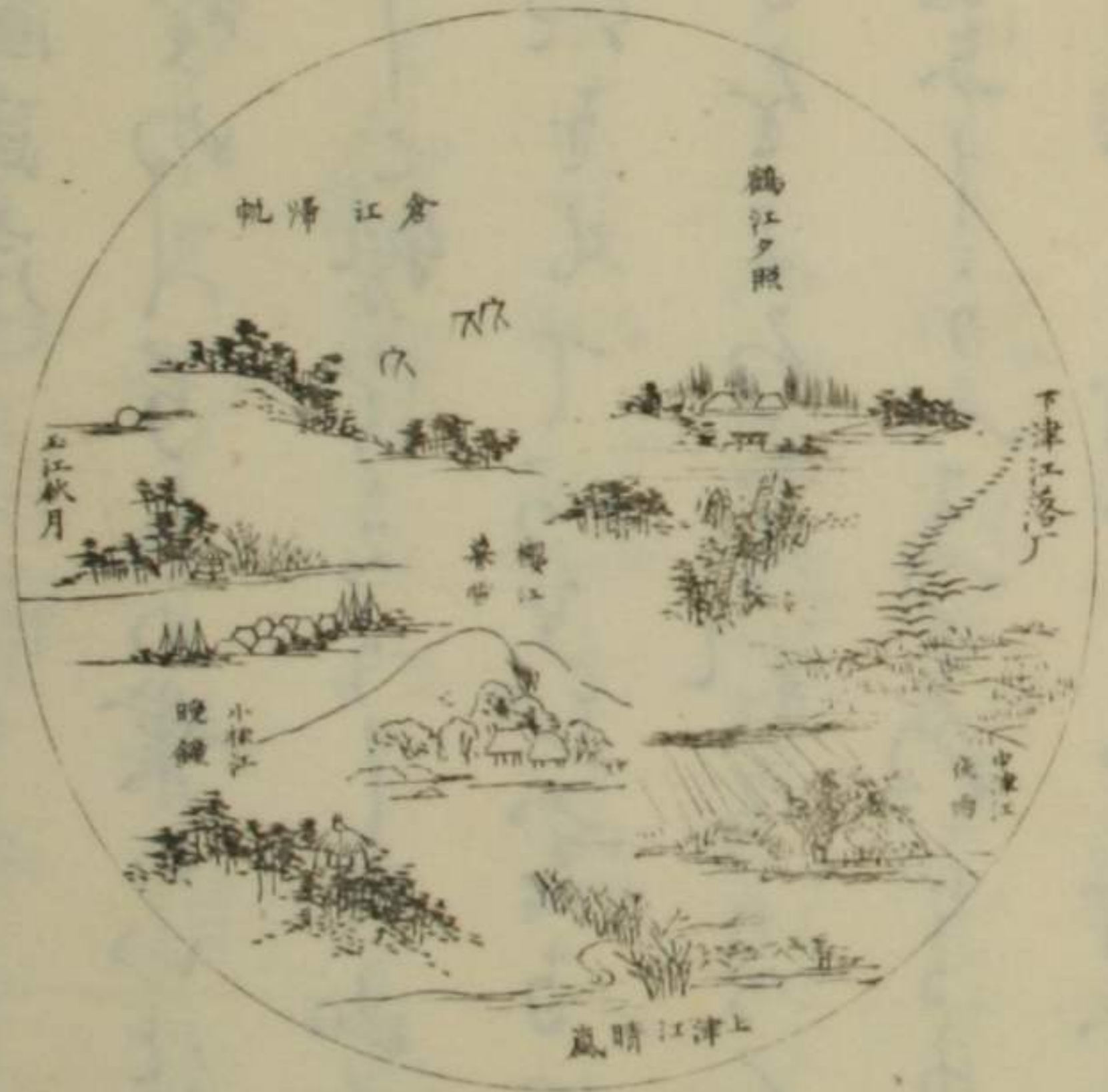
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18  
JAPAN  
TaJma



呂門  
號 303  
卷 1

江潮城名所之圖  
 一 慶安承應の間  
 二 江秋八景といへり各  
 起れりそハ鏡江得江蒔  
 江柳江藤江萩津江二  
 江ニ江等の名所をいふ  
 後元祿の比安部春貞  
 山田原欽雲谷等藩等の  
 三人仰せて御城近き  
 所を回らし心奇景あり

所々を撰び等藩に因せ  
 一り其の上ニ春貞ハ歌  
 を詠し詩ハ原欽云と作  
 らせりいづる今の八江萩  
 名所是なり



八  
江  
潮  
城  
名  
所  
之  
圖

萩通屋藏版



瀬城名所圖画序

此ふとい本程ぬし弓矢の業のいとま  
こころあかしく勢字さるうしや山名  
のいさまよ記をもてつとむ宮も乃  
うらひしきをよるこもれうらるんを  
即ち忽ふましうへつらねるもの  
よちんはるし世し行はる名所圖画

のさぬといはれまをのちりまはひの中  
うなれと見まを風ま記のかこもしふ  
し河まの物よりまねる情もいりま  
かたなうししといかいやりすつしき  
しとい河まを秋君の志あしめを國  
のうらをこもくくつとまんは東  
山名國山をかより西豊浦の海をま

と見て... くれ... けぬ  
— 海山... の... も  
... 粘... 尋ね...  
... の... の...  
... やま... 年月...  
... けれ...  
... 大城... ね...  
...

ま... け... ね人  
の... 山... 原  
い... ね...  
糸... け...

藤原乃昔街

八江菽名所圖画壹之卷

目錄春之部

長門國權輿 神功皇后御職之圖 菽始元

御城甕起 菽市坊之總圖 本街通

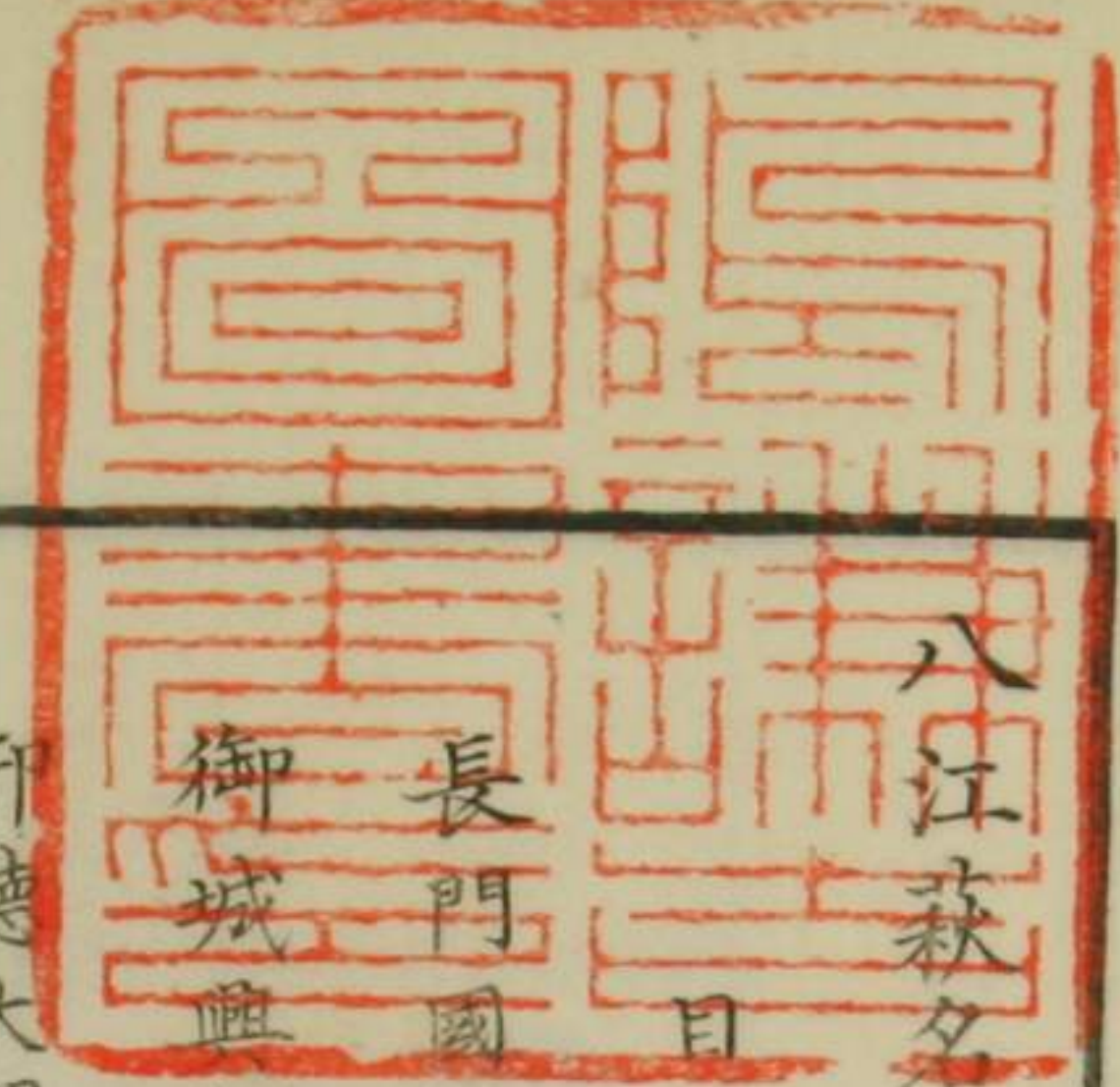
仰徳大明神社 菽荷社 同御祭禮舞樂圖 洞春寺

妙玖寺 御本丸橋 有倉松 同圖

御臺所御門之圖 塩止御門 三摩地院

満願寺 二丸天満宮 宮崎八幡宮 同圖 東御門

大くりう坪 得江歸帆 阿武松原



菊濱之園

天樹院

同園

四本松葭池

深野町馬場畝

騎射之園

中之總門之園

春日社

同園

妙悟寺

金剛院

同園

明倫館

同園

已上參拾七條

心正

瀨城新復舊奇景  
 八江中縱視畫圖  
 妙自為天地工  
 濟灣主人題

凡 例

凡此書の序次ハ

大城を首りて越々瀨ニ尾ヲ但一眺望ニ便ある所ハ序ニ  
らさるも少ふくすその瀨を画くニ奈古屋島の遠望  
らり梁瀨を画せるに螢火山の風光をとりて如く其大槩ハ  
春夏秋冬の四時ニ配分りて坊内を経緯一郊外を周旋  
に総て七冊を以て全部とす

凡菽ハ其地自ら天府豊饒一して建置沿革を論ぶニ堪ず  
よりて神祠佛宇の壯觀山川原野の景勝ハ画固全ク

當今の形象を摸寫に志すハ何處と上古の形状を示すハ  
き所ハ猶當時の風俗を画く四季遊觀男女の服色容  
儀ハ今日の時様を標オにらん且ハ城下の繁榮を志すニ  
とあらわのちり

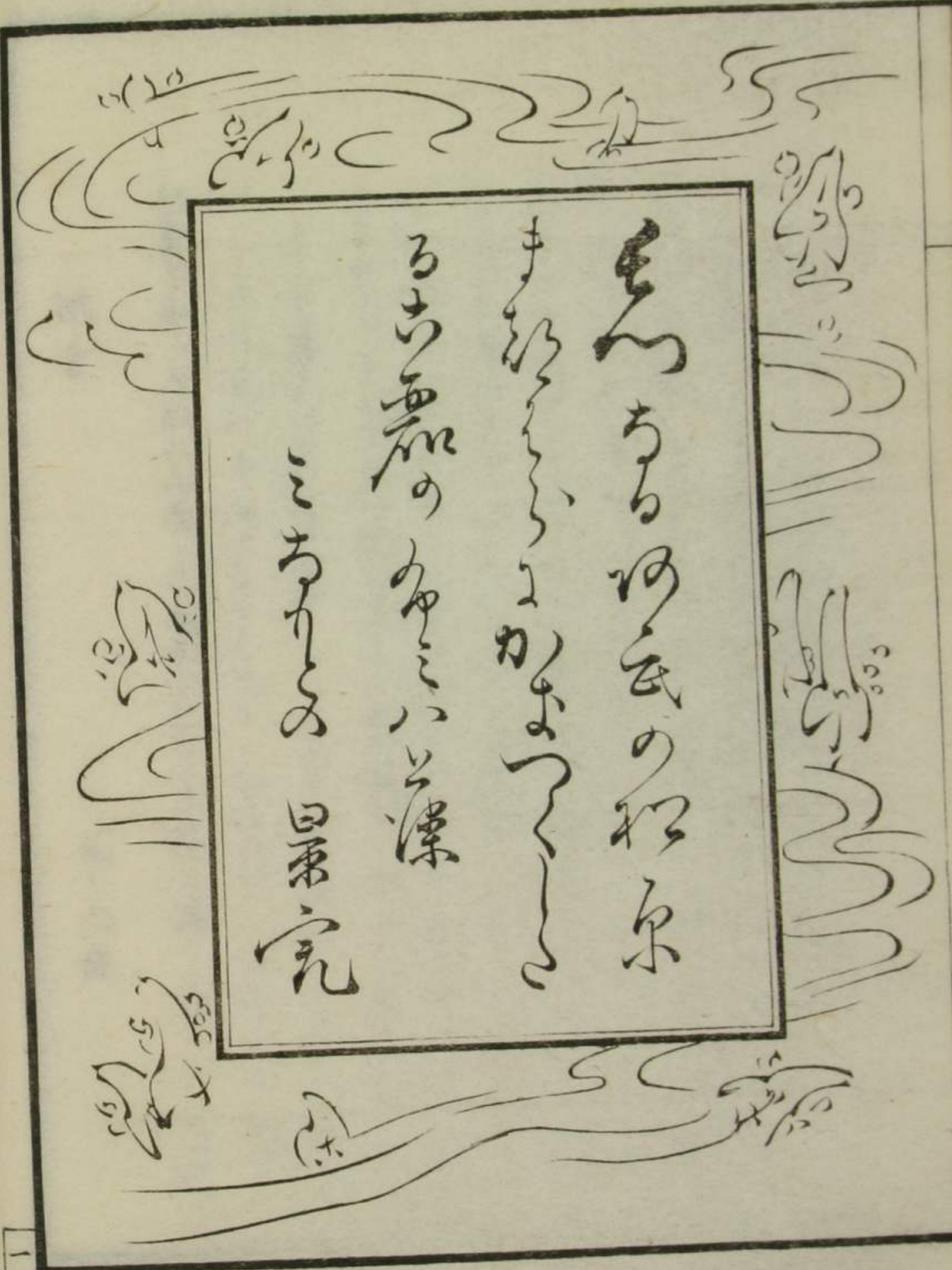
凡方位ハ正位ニ循いて彼某の前後是某の左右と互ニ標す  
東西南北も亦とあらり觀ん人察に志す

凡風土生産ハ悉く舉るに遑あらず以て只管據あるを擇ひて志  
す

凡神殿佛院ニ載する所の靈像書画の類も倭も漢も







もろちん河名の和泉  
こちりる 景完

八江菽名所圖画一之卷

春之部

木梨恒充 著述  
山縣篤藏 補正

長門國 山陽道に属す國府ハ豊浦郡より他ハ美祢郡大

津郡厚狭郡三島郡阿武郡以上六郡ハ古事記穴門より作ら

事記穴門と書く 倭名抄奈賀 度とあり 抑長門國の濫觴を考ふるは往古檀

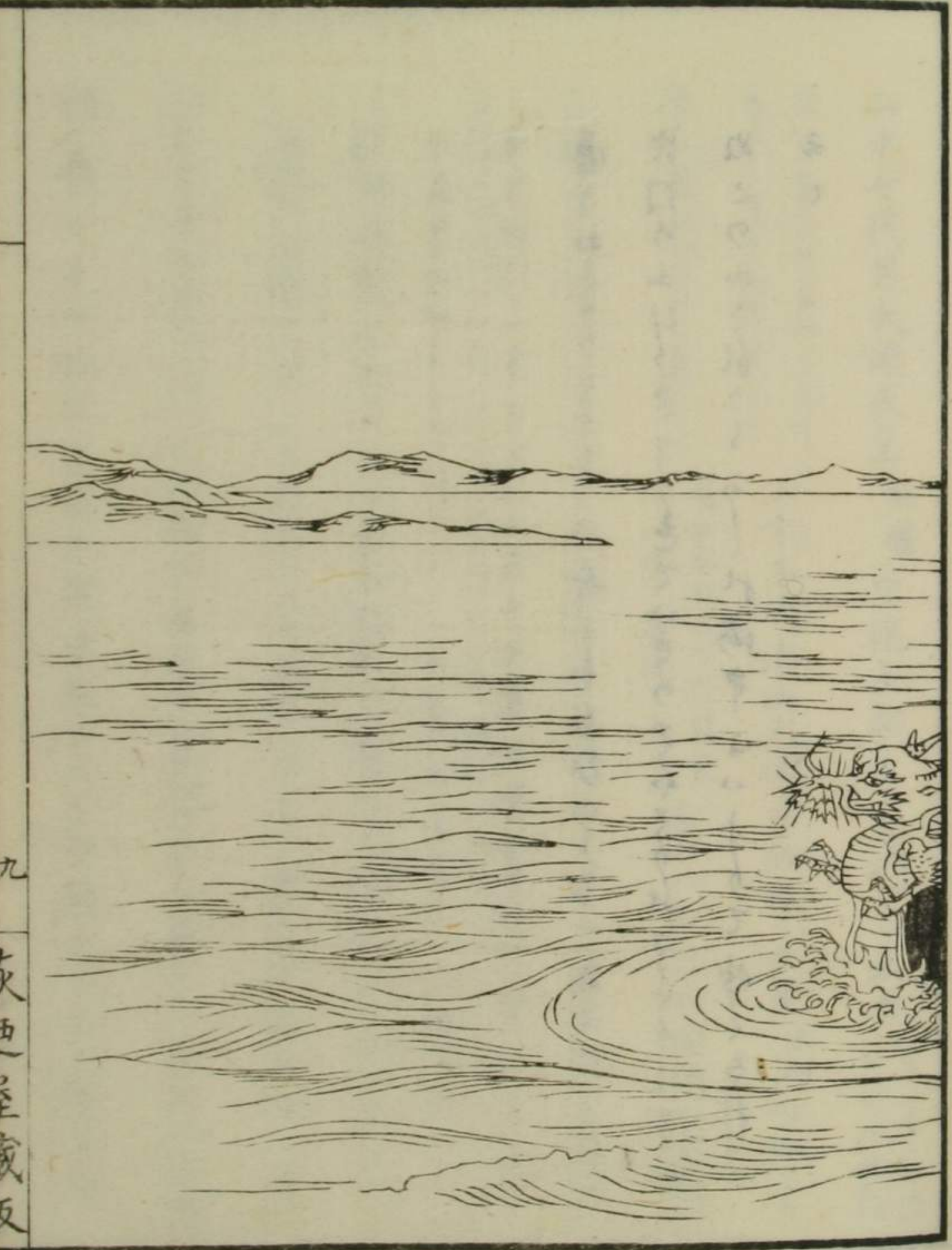
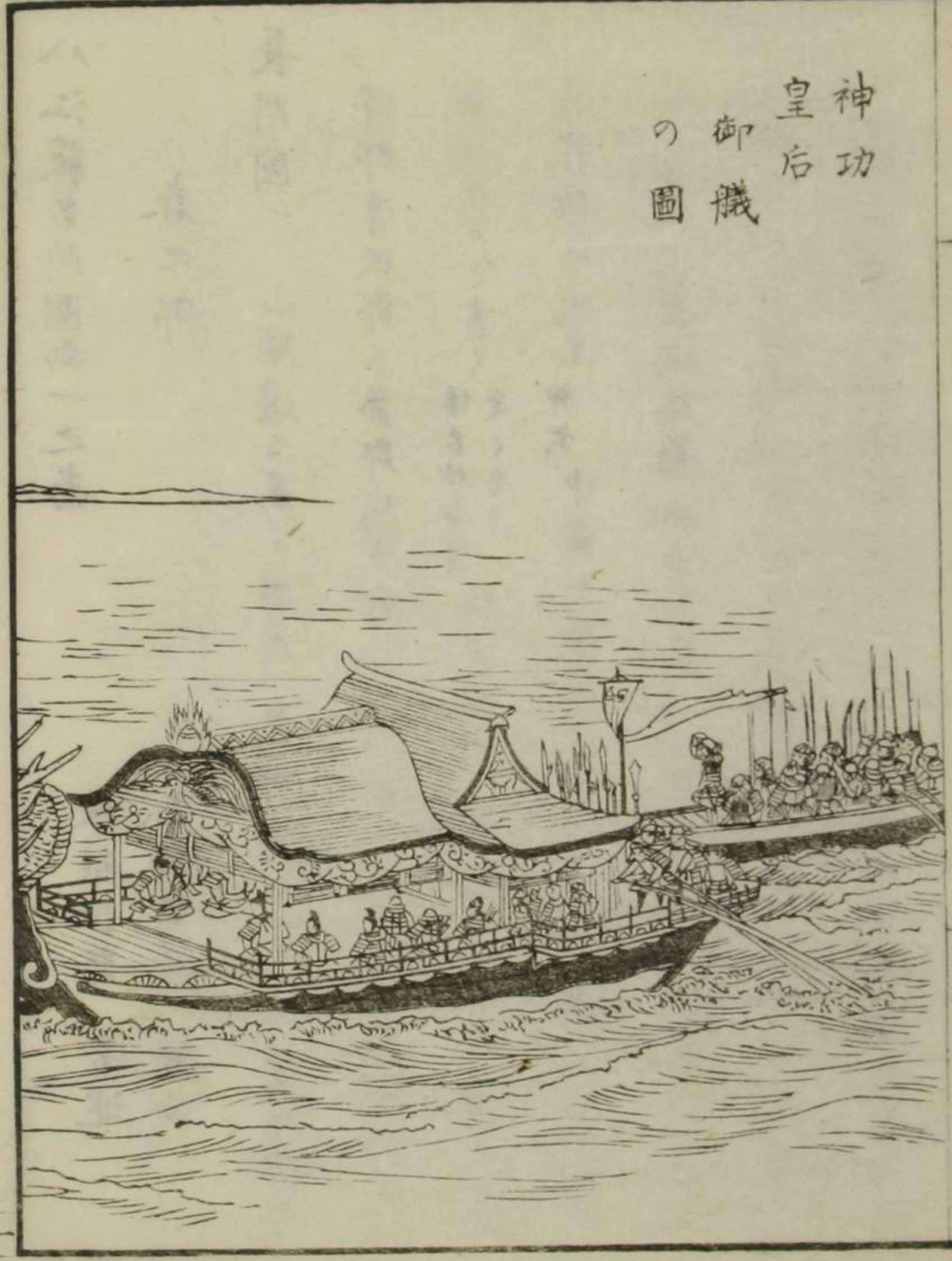
原宮御宇天皇 神武 中國を静謐ましくする時ハ當國の跡見え

す人皇十代磯城瑞籬御宇天皇 崇神 の紀ハ穴門の号始て見ゆ十

四代足仲彦天皇 仲哀 筑紫の熊襲を静めんとて行幸あり

ける時ハ豊浦に大宮建堂を以て穴門の豊浦の宮御宇天皇とさ

神功  
皇后  
の御機  
の圖



九  
灰  
西  
一  
聖  
威  
反

神功皇后御機圖

神功皇后三韓を平らんとて艦志玉ひり時の漸

稱奉るまゝ神功皇后三韓を平らんとて艦志玉ひり時の漸  
りりさる古書に詳に猶源の貞世々道行方々に委しくつら記す  
穴門の老浦の都とす作ること今のおる軍とつ目の國との  
阿多比き山のひとりの中と終り一月のまちひの路さう  
りあまのやうして作るその岸の東西に人家けり  
り穴門とをさしていふやうに案を皇后の軍の舟  
通うかたうりやうに舟とをわひのち一木のほとには  
穴門の山ひりきりきりていきのそやまひれりりよさの  
ぬこの山さぬうらあは海申よふよりて停ちりり  
云々

二十七代男大迹天皇 継體 の紀に初て長門と見ゆ そよりの日

穴戸かとの字かたうく ありて定まぬるまゝ 三十九代近江大津宮御宇天皇 天智の紀より

後ハ長門とて書り 續日本紀以下の國史 ちうハあれと穴門を長門

に改めらるる詳らちうに諸國名義考より穴のぬき水門あ

る故に穴門といひを其形長きゆゑ後ハ長門といひんとり

まゝ鈴屋翁の説ハ穴門の間ちうきゆゑ長門といつるるハとい

つりかゝる義コトもやうりくと思ひを我師二葉園先生ハヤ既考へ

られらるのあれハ此を傍といはさる當國ハ中國より昔ハ守椽目

を置れらる其後弘仁九年三月長門の國司を改めて鑄錢司と

ナまゝ貞觀七年五月當國一介を置まぬ

ハ雲津抄國の郡長門ハサトの件ニ云諸國ハ名のまゝまゝありてあり  
まゝその名所の中よりこゝにたゞしつゝあり云々

萬葉

秋八月二十日宴右大臣橋家歌四首

長門守巨曾倍對馬朝臣

長門在奥津借島奥真經而吾念君者千歳尔母我毛

人九六十余國をよめるうち

家集

海のなりときハ入てかつく番も人ハあはれとて

長門國号名義畧文左ニあり

長門といふ國の号れこ古書ハハビき記ええす古事記傳

卷廿七ニ穴戸ハ長門の國と豊前の國との間の海門として筑前國の

北面海より山陽道の南面の海に入る門なりまゝ同書卷三十ニ穴

門の事日代宮段傳廿七ニ委くつゝりこゝの國名も今長門

國より此國の名書紀崇神卷欽明卷より皆穴門とあり孝

徳卷よりもあるあるハその以てハ長門といハをきりて

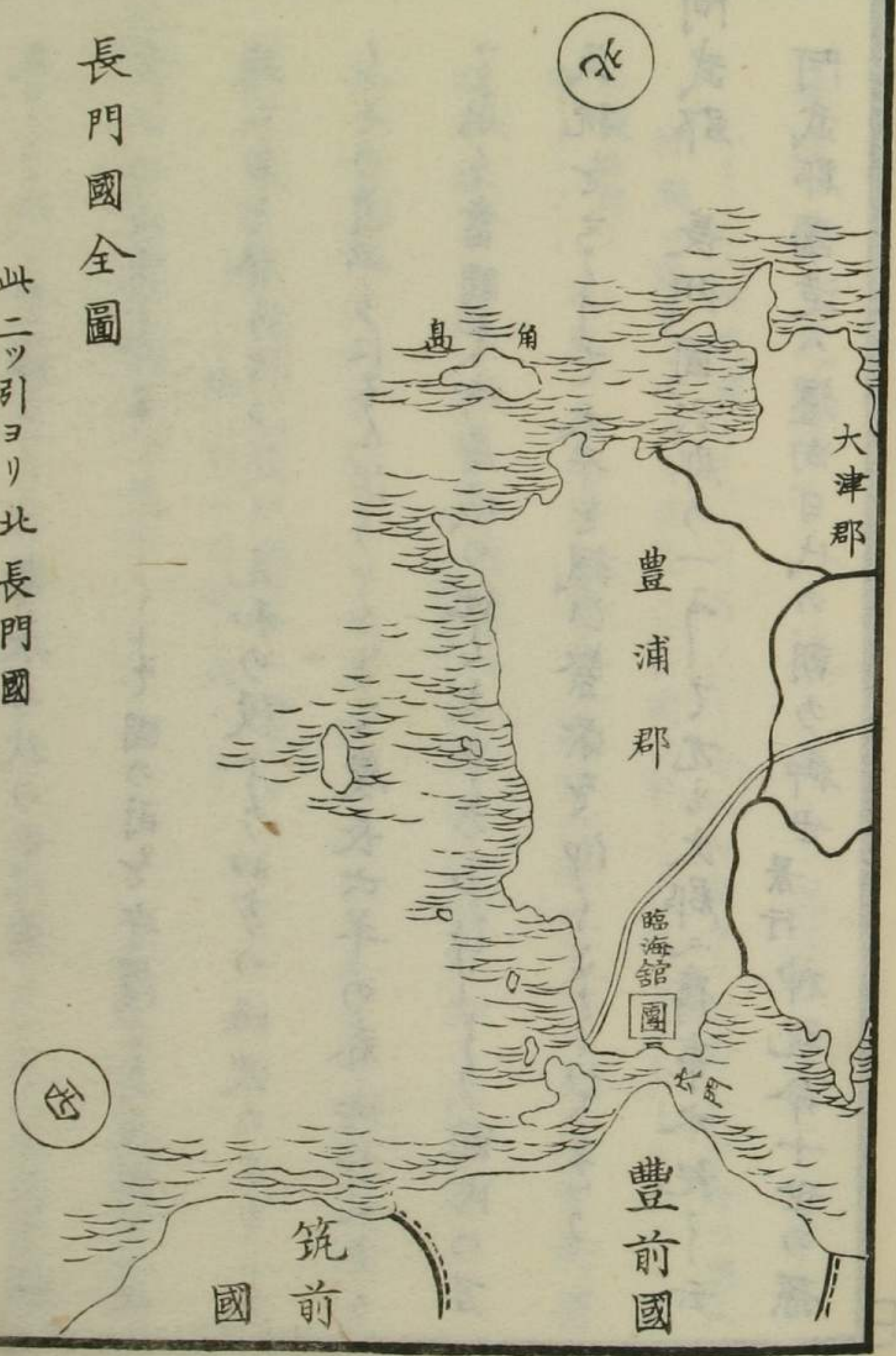
とい何の御代ニ改められし詳りなき彼  
穴門の間長き故に長門とつけられしなり

といひを後ニ長門と改めしものとなりし依て諸國

名義考より穴のみき水門ある故ニ孝徳天皇御代よりハ

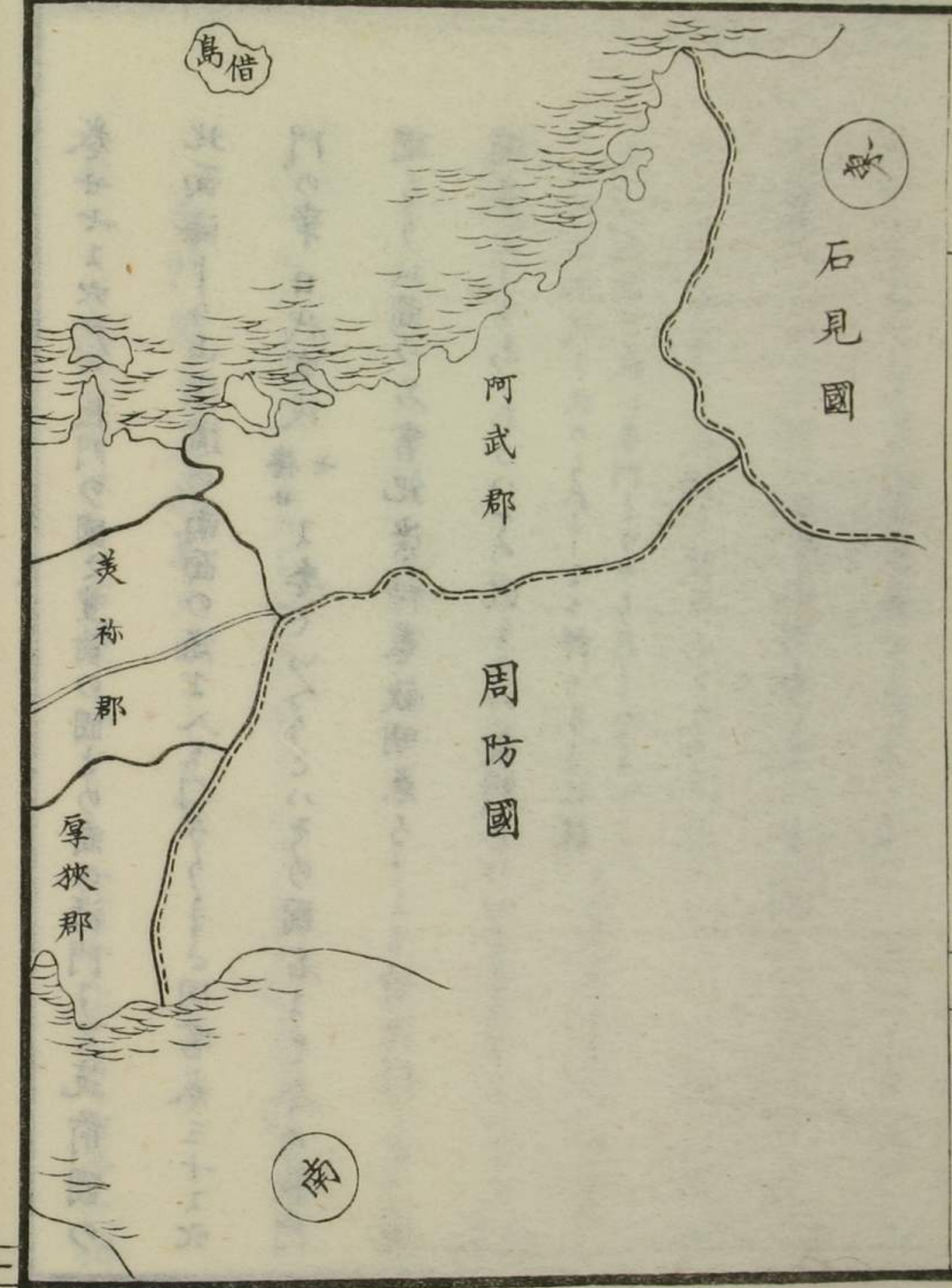
穴門といひを其形ち長きゆゑに後ニ長門といひ

長門國全圖  
 此ニツ引ヨリ北長門國  
 南穴門國



十二  
 大西屋藏反

島借



大西屋藏反

といふ

夫より代々を經るまに壽永の秋の本比葉ちりくく乱き鎌倉山の山嵐といふく烈くく國の司を守護る之庄園り地頭の名を發りたる近く元和の役より四方の海波のさるきかしく七の道平たるん流りたるさる慶長六年の春御打入ありて永く當國を御居城の地とさるをむひりより國內の万民枕をさるりて太平を諷ひ繁栄を仰ぐことさるはちせり

阿武郡 長門國六郡の一なりて尤も大郡之舊事本紀一云阿武郡國造ハ纏向日代の朝の御世景行神祝命十世の孫

味波之命を定め賜ふことありて郡も國造を置さる事多

ハハハ阿武國といひりちりハ今大和國より吉野を吉野の國又初瀬の國とありて國造り今の國の數よりハハハ多しされハハハ初瀬吉野ハ九東ハ石見國に隣りて徳佐御野坂を限り北ハ多万卿佛

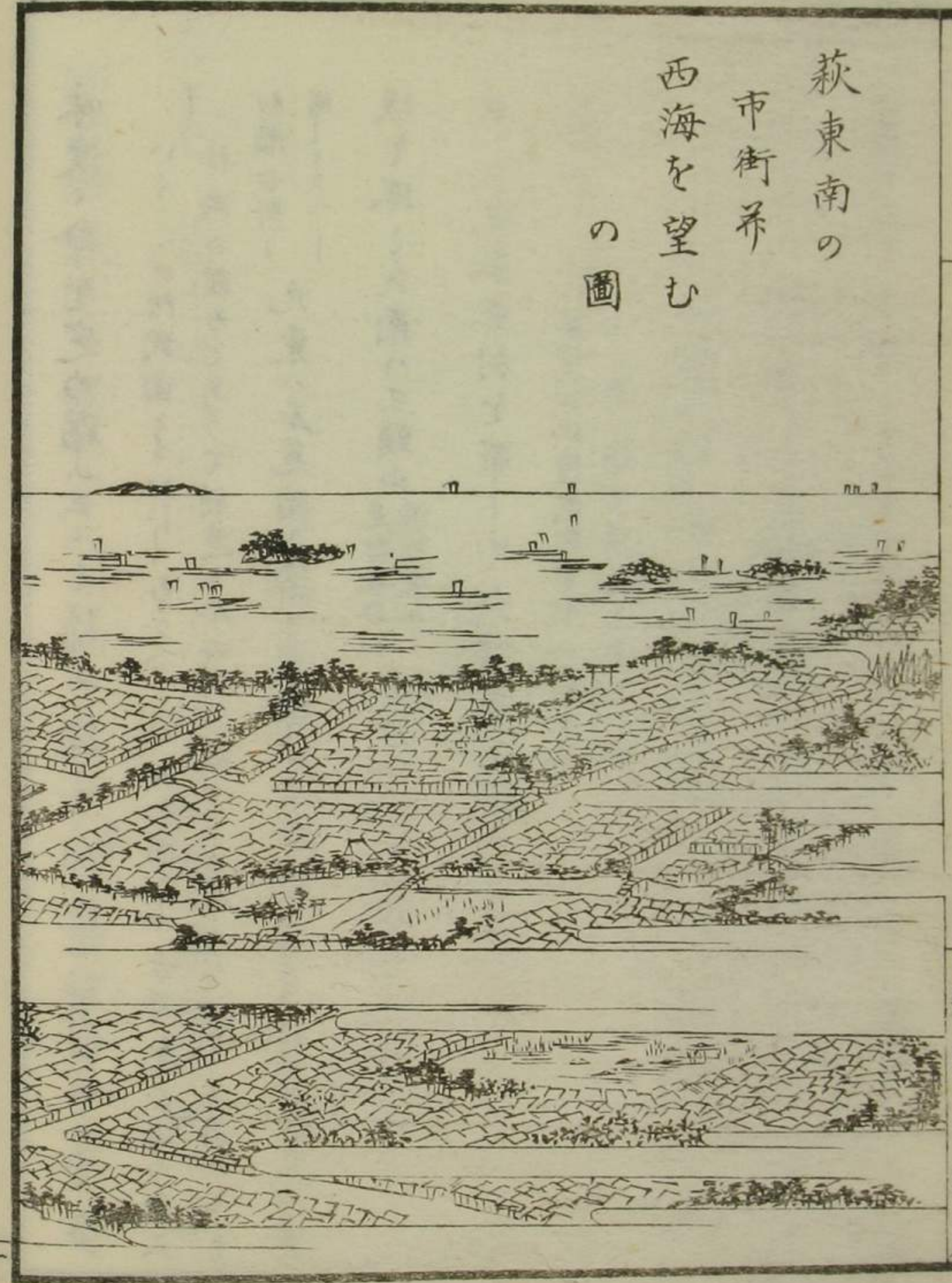
坂を塚といふ南ハ三頭山是防長石三州の境なり地福郷佐波郡袖子村を環まり

西ハ三見飯井村を帶りて大津郡に連る是を阿武郡四至と定められり寛文の比阿武郡を十八郷に分つと椿八幡宮傳記に見えり

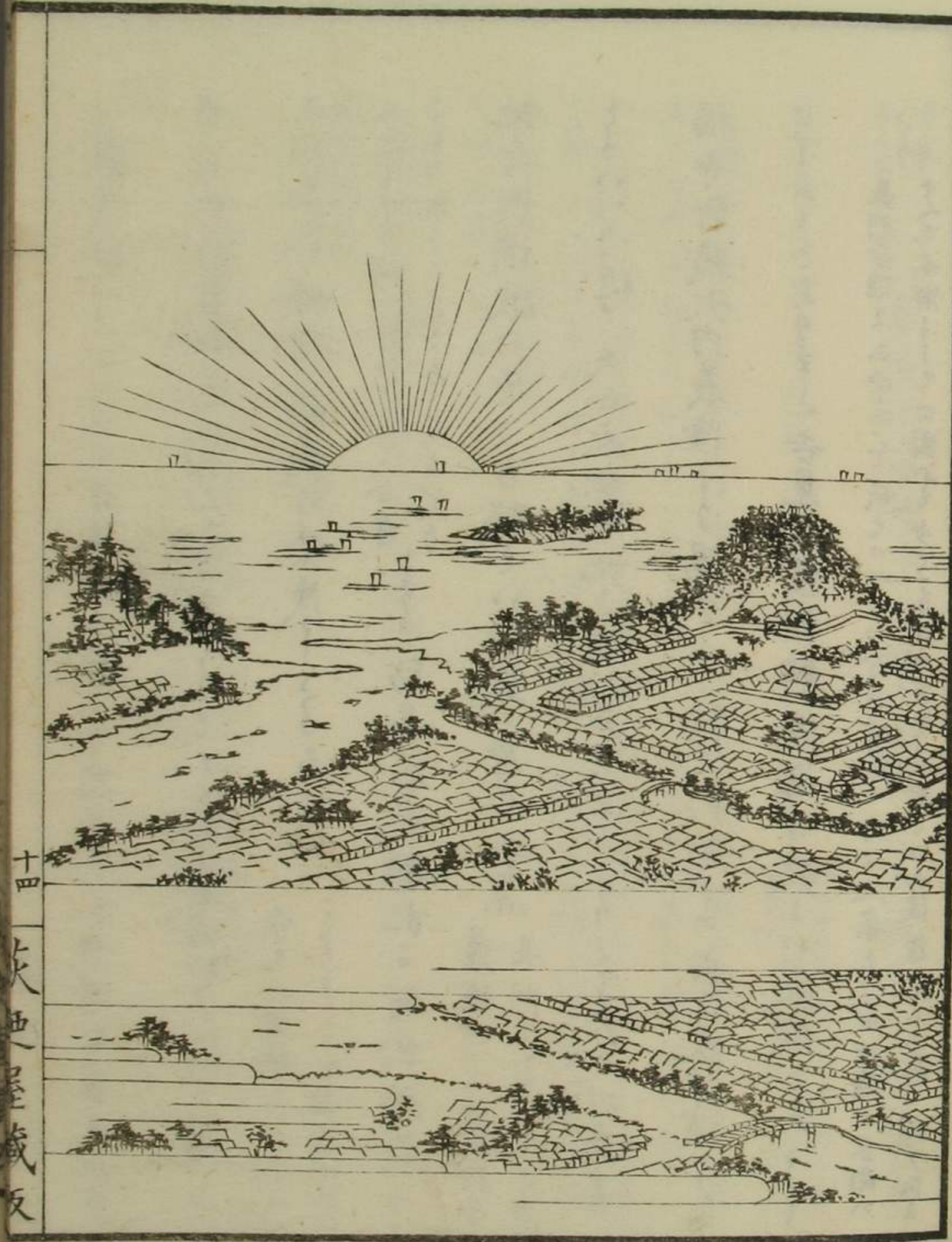
萩 阿武郡椿都波木郷なり或書り阿武郡波岐の郷と

ありさる萩の地を上古の島の極原に舊跡といひて今川島といふも此号の残りたることいふと島といふものも據あるも榛

萩東南の  
市街并  
西海を望む  
の圖



萩市街並西海を望むの圖



十四 萩市街並西海を望むの圖





西限大泊瀬於保波世俗申酉至參見中山坤究玉江  
郷山田口南限鹿背坂牛未河内入口至巽究川上椿  
瀬東限松本峠良至小壑田北兼軋方角限海濱也

同  
阿須波原 廣原而荻繁多也

在泉  
慈れも阿も波の弟も咲萩の花とちうらん名了をせられ 親房

朝鮮日記 下瀬日記と云文祿二年吉見元頼朝鮮渡海の時家臣下瀬七郎頼直の日記なり

一 三月八日二つものをいさむらうそ福舟せん志やうりん山宿にあされ

法修人出陣し交るうり、おらひるほふらうちよとぎうらゆる

あされ山船の流る福江久きん坂のふらひし交りては座陣

こく周防宮とらうし支夫もぎて一指月へ山忌を命し法修之

外、寺家社家あゆゆりきり

さて慶長年間九年の春指月山の今御城麓を用き 御城を築

りせむひりり地形廣潤壯大りて今ハ七里計四方を築と

稱す 東より水川峠西玉江南 峠坂北猪熊峠を隔ち 大方ハ東南二川を帯ひ 二川のつらハ西北 其條ハ詳ニ

韓海に連るれる地にて魚塩の利乏かりぬ御城下とらるる

藩中烈士の第宅ハ巍として薨をさうく商賈市麩の家屋

ハ堂々として軒を連ぬ突し自りりる金地とらふつ

御城基立 往古北條上野前司直元居城と云 是ハ烏田氏の説 なるハあれと居

所當地といふと定めりしハ阿武郡を領知せし人とのこえて大井村八幡宮 侍記にも北条某と云名あり按じ直元の南朝の爲に亡されり人なり

近く天正年間より吉見正頼居城といひ其後天樹公御  
打入ありて永く御居城と定まをひより日よ業く月よ壯  
して終る方代不易の城地とをかりたり

本街通

椿町大木戸より橋本町御許町唐樋町東田町西田

町瓦町兵服町一丁目二丁目を経て南片川町までの総名にて

街幅九五間余或ハ六間と存する所あり

因云九城橋敷舎  
を設るの地ハ鬼

門の方を過く是を本朝の故実と云当地よく叶り当所も唐樋より以南  
ハ南北を假町といひ其以西ハ東西を假町と云横町ハその裏よりちると准  
して也

正一位仰徳大明神社

御城二の御曲輪西御門内にて御

山より傍てあり太官司中麻原氏より神主吉屋氏藤本氏三  
家分番して賛辞を掌る

祭神ハ江家の始祖として中興烈祖の御霊を御相殿に齋ひ

祀ま

往昔より仰徳明神と崇へ奉り後邦憲公清時天保元  
年正一位仰徳大明神と額面の勅字を賜る

当社ハ

宝暦十二年の御再造として尤壯觀の御社に傳記詳と

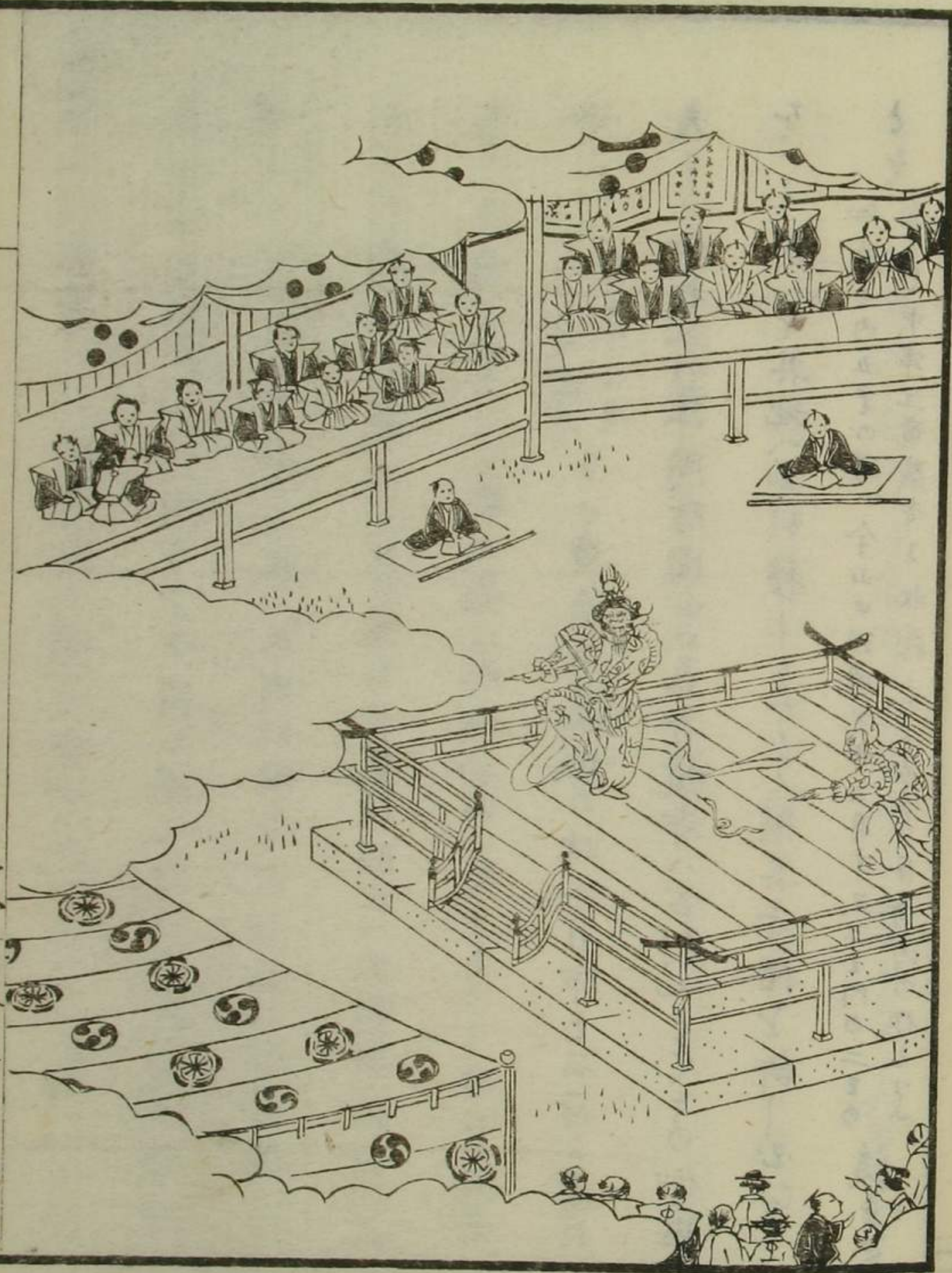
りとも憚りあれは省く御例祭ハ九月晦日より十月一日とす

其式尤嚴重くと御参詣ありまを神前におきて御連歌或ハ

舞樂を奏す此日ハ殊に尊卑の差別なく参詣を許す

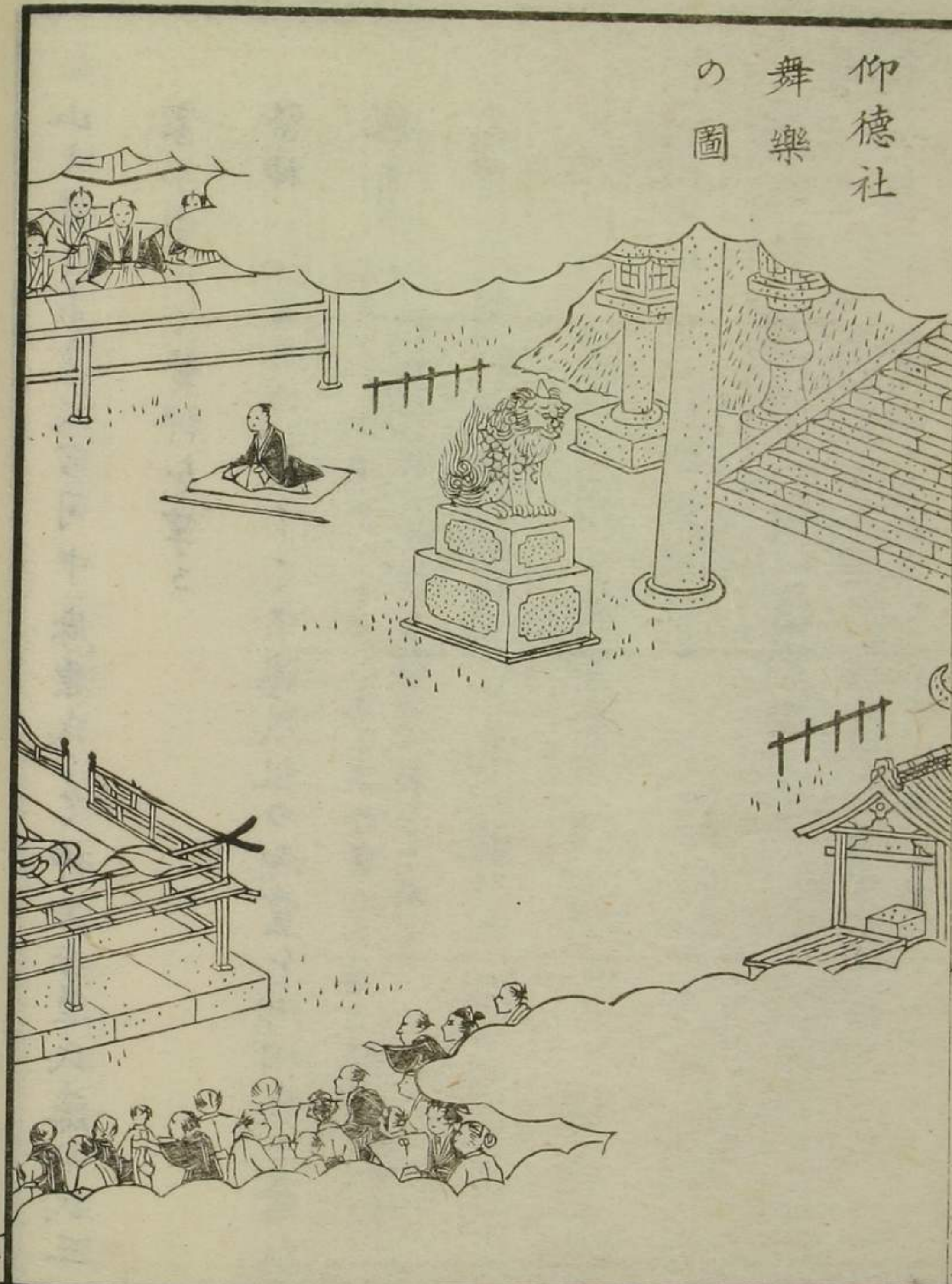
稻荷社

本社の右より一宮社ハ江戸麻布正徳寺の鎮守  
神より一を宝暦七年當所ハ所勸請あり



十八  
 火  
 屋  
 蔵  
 反

仰徳社  
 舞樂  
 の圖



新  
 延  
 屋  
 補  
 片

正宗山洞春寺

同所左隣る京師建仁寺派の禅林にて

款臨宗三箇寺の一院あり中興の開山の嘯岳鼎虎大禪師

筑前博多産 元龜三年の春天樹公隆景公両君の御再建に

本堂本尊十一面觀世音菩薩を安置に脇士ハ不動尊毘沙門天

あり寺傳は曰く、藝州高田郡相合山の禁ありて竜昌山洞春

寺と云ふ今も残礎石ありと云ふ まゝ廣島河築城の時十日市と云所は遷に

夫より御考入以降周防國山口邑香積寺ハ古刹としてその伽藍

をとり用いて其地へ御移りたり猶其寺格を許さむい

とそ伽藍の内五重の塔ハ今山口瑞瑞光寺に存す又二王門の二重の面とて中津江竜蔵寺に収蔵すその像ハ百濟國の作と云ふ 後まゝ

慶長八年當所へ轉遷せり尚寺に毎歲三月十四日十五日十六日の三日

十四日の早朝より十六日の暮まで 御國中年中一切の御祈禱して濟家一派の僧侶集

會して大般若經一千部を讀誦す此読經ハ寛文二年五月六日を始とし已故享保八年より三百部に改らる

りもとハ廣島の江代より始つものにて嚴島宮に於て御祈禱の由經 其式殊に

嚴重して此日の參詣人貴賤の老若諸の疫災をめかまんと

て市中ハ更ありいりゆる幽里遠村のものより遠くとせしめて未

り場集り前山嘯岳禪師を世に万年和尙といふは初筑前博多聖福ちよ住職せし時方丈の額に万年といふ二字ありよりて万年

和尙と唱ひ奉りき能書くまを改を万年様といひ侍り所出さるるも万

年とあるもの多し天樹公隆景公御祥所渡居の時ハ供えまさせむひ

新編 慶長八年 正宗山洞春寺

御靈牌殿

本堂の左あり 御靈牌 東照宮  
御本依將軍家代々の御靈牌を安置す

宝物 本坂  
の筆

顯西殿

本堂より一丁より石壇を上り洞春公序木依を安置し  
奉る是ハ石州銀山長安寺に在るを写して納めりし下ニ

本堂額

萬年軒

吉就公御真跡

本門の左内ニ香積寺用山仏宗真悟  
禪師の木依并ニ位牌を安す承德

元年四月十七日迂化とあり中ノ大内十九代義弘公木依並位牌  
を安す應永六卯卯十二月廿一日と額す是ハ香積寺大且那より也

鐘銘 畧之

敬白 奉懸宸鐘

長州伊佐別府南原寺常住 大願主 金剛仏子真海

應永九壬午年十月十日

御判物左より多す

此御判物當りいし多し  
傍りに一ツニツを採るの也

將軍義昭公御判物二通

三原從蓮公御判物  
御判物  
了年和名  
御判物

二十  
火  
色  
屋  
藏  
板

天樹公御添状 寺通

安藝國洞春寺  
可合為法山列  
如作

天正十五年  
正月廿二日  
特大御堂

安藝國洞春寺  
可合為法山列  
如作

如作

天正十五年正月廿二日

特大御堂

天樹公御添状 寺通

其寺之寺又  
已住持所  
日輕福  
子之宗於家

天正十五年正月廿二日

作事し多志也何一也  
の件

天保三年十月十日  
輝光

金城山妙玖寺

同所より西御山の鼻より臨濟派の禪宗

よりて京都建仁寺に属す本尊ハ釈迦如来よりて脇士ハ普賢文  
珠の開山ハ衡陽慶甫大禪師と号し尚寺ハ始周防國玖珂郡通津  
の庄に在て長徳寺と号すを天文十四年安藝國吉田へ引せあり  
て妙玖寺殿の御菩提所とせられより御お入の時任職玄策西堂

御供一末りと慶長年間御再建成り所ニ

あり旧地今安藝國吉田  
よりて妙玖寺と号あり

公状之寫



御朱印

一 周防國吉田  
任職より 任先例  
了執務し 惟如件  
天保三年十月十日  
関白秀忠 殿  
中 兼 方 坐

十二  
一  
一  
一



御本丸橋

御本丸門前御堀に架る始極樂橋といひをよ  
しありて幸橋と名をかへられり

橋の裏板に作事奉行井上傳右衛門と録すり或書すり

近以公令に御本丸土橋張番とある板橋といふんとする前を云

有倉松

御本丸御門前あり古昔有倉氏某

有倉氏ハ吉見一族 當所

居住せし時

旧地今東御門の西にありと云

一株の小松を栽措きを數多の年

月を経て竟に周圍六圍に餘まる大樹とをちれり實に名を

松よりも高く秀て緑ハ君の惠の蔭と共に深し今ハ方四五十歩

跨りて無双の靈樹とハちり々

長門金櫃云御城は普清の御此松樹に日雇の者等割菴衣類を

かけにありて枝葉撓み平  
うに等えよとちれり

塩止御門

東園御茶屋の前濱きはあり御門をいふむろ考

所より宮崎社辺東御門のありハ玉江の湊にきて潮の満干の

通路ちりきといふ然るに御欄地の時塩止とて當所土堀を築

き即て御門を建たれりといふ則ち号けて塩止御門と

いふとそ

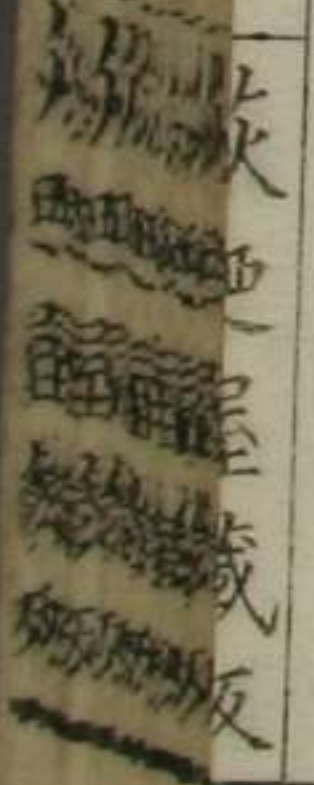
高峯山三摩地院

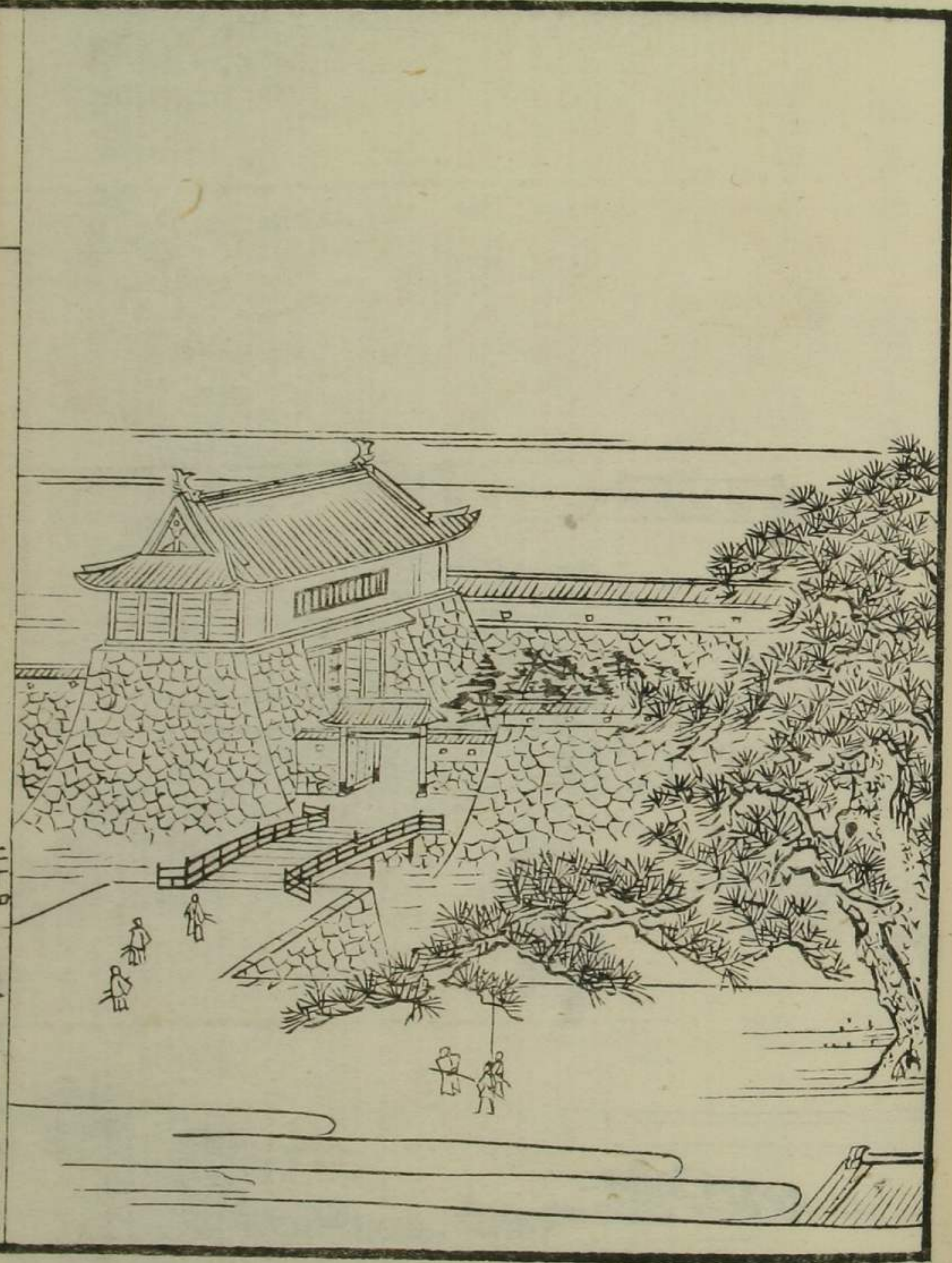
昔ハ永長寺と号す同所より少一行て海側

在り古義の真言宗にて満願寺に属す本尊千手観音ハ行基

菩薩の作かり阿闍梨真亮房長時僧都を中興とせり相傳ふ

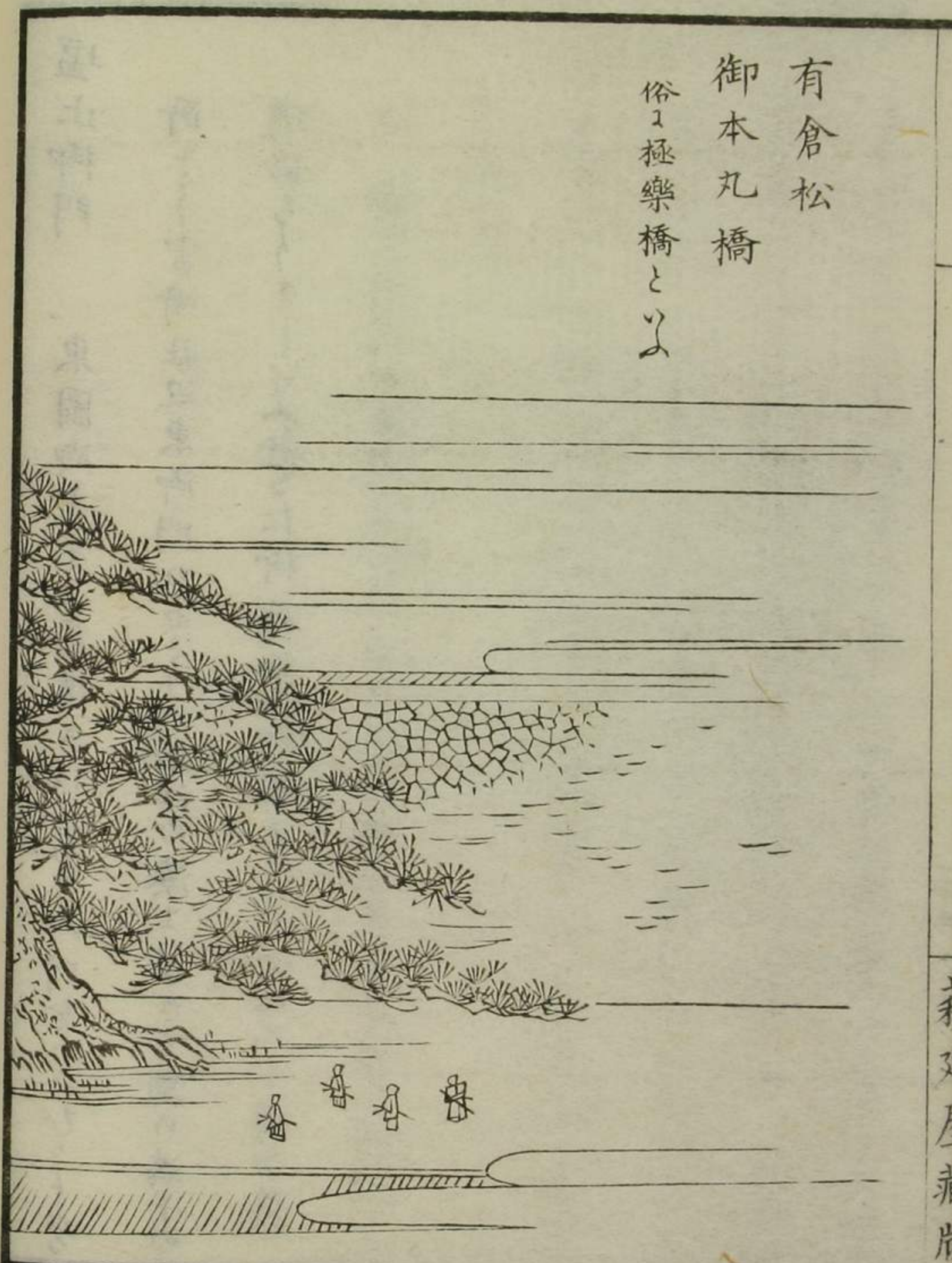
とめ安藝國吉田郡山に在て江田某の開基といふ夫より天





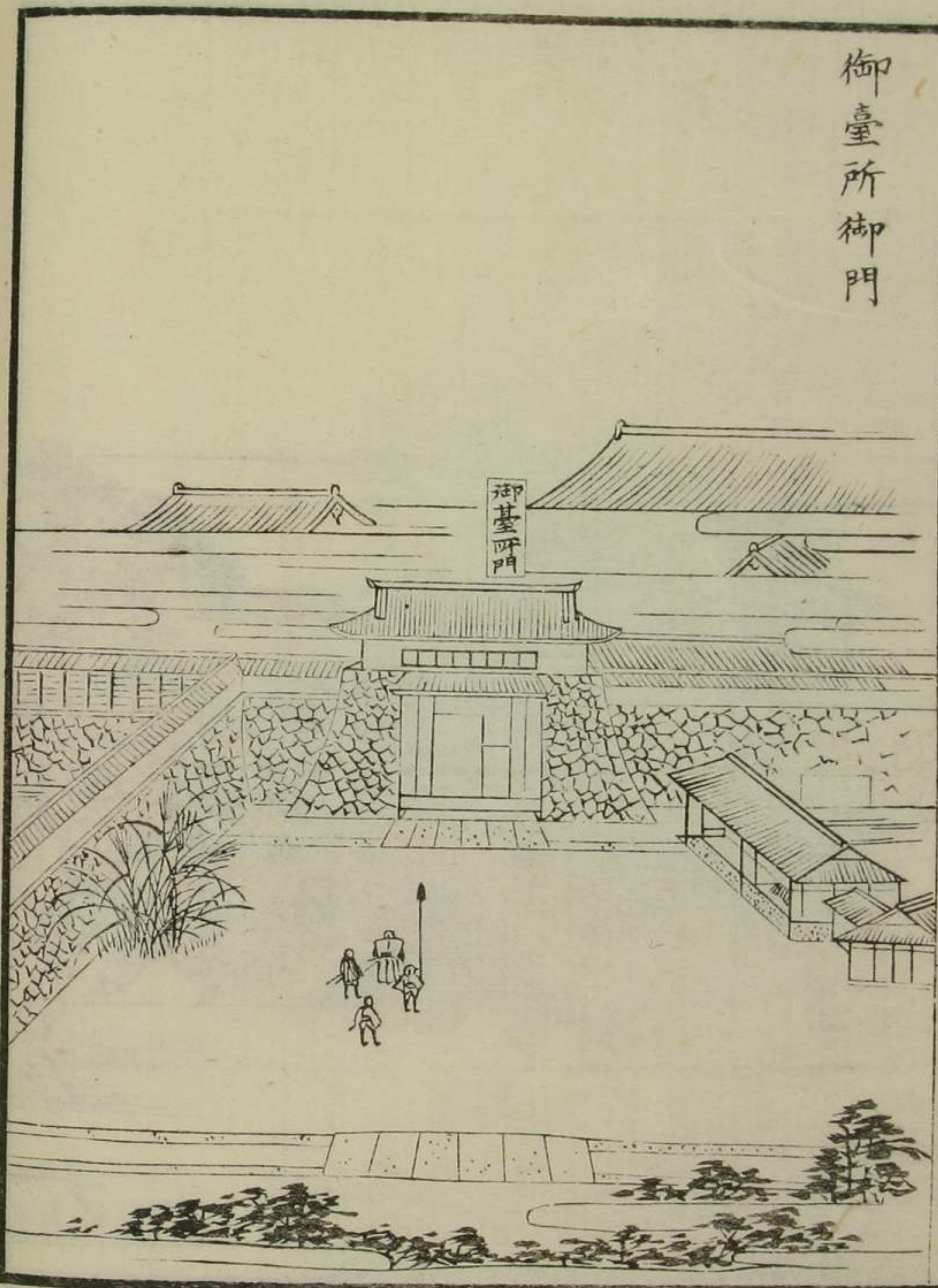
三十四  
 御本丸橋  
 有倉松

有倉松  
 御本丸橋  
 俗に極樂橋といふ



有倉松  
 御本丸橋  
 俗に極樂橋といふ

御臺所御門



和  
長  
末  
至  
り  
て  
萩  
地  
古  
護  
の  
為  
と  
て  
当  
処  
に  
移  
さ  
れ  
し  
と  
る  
こ  
御  
臺  
所  
御  
門  
御  
臺  
所

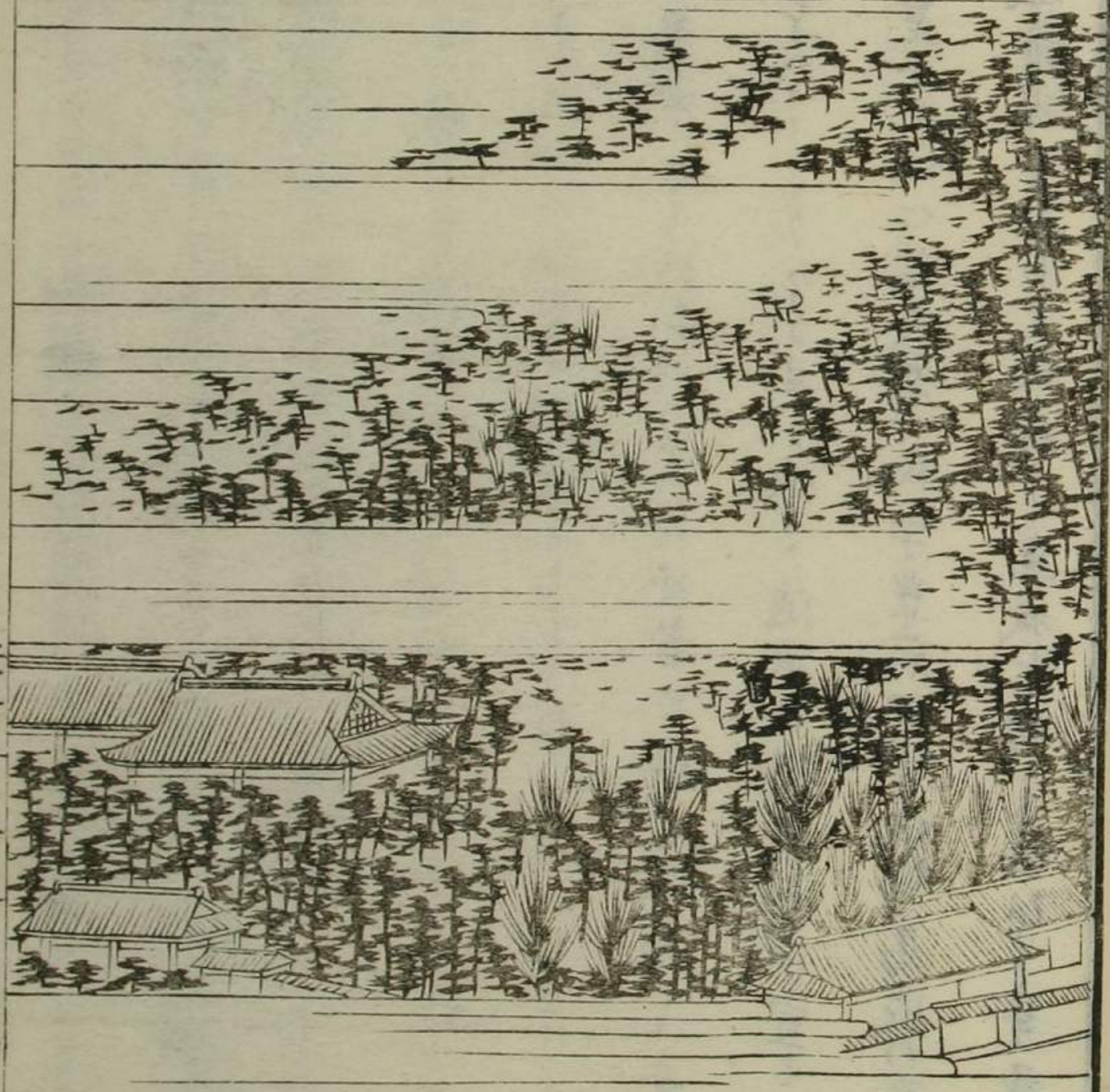
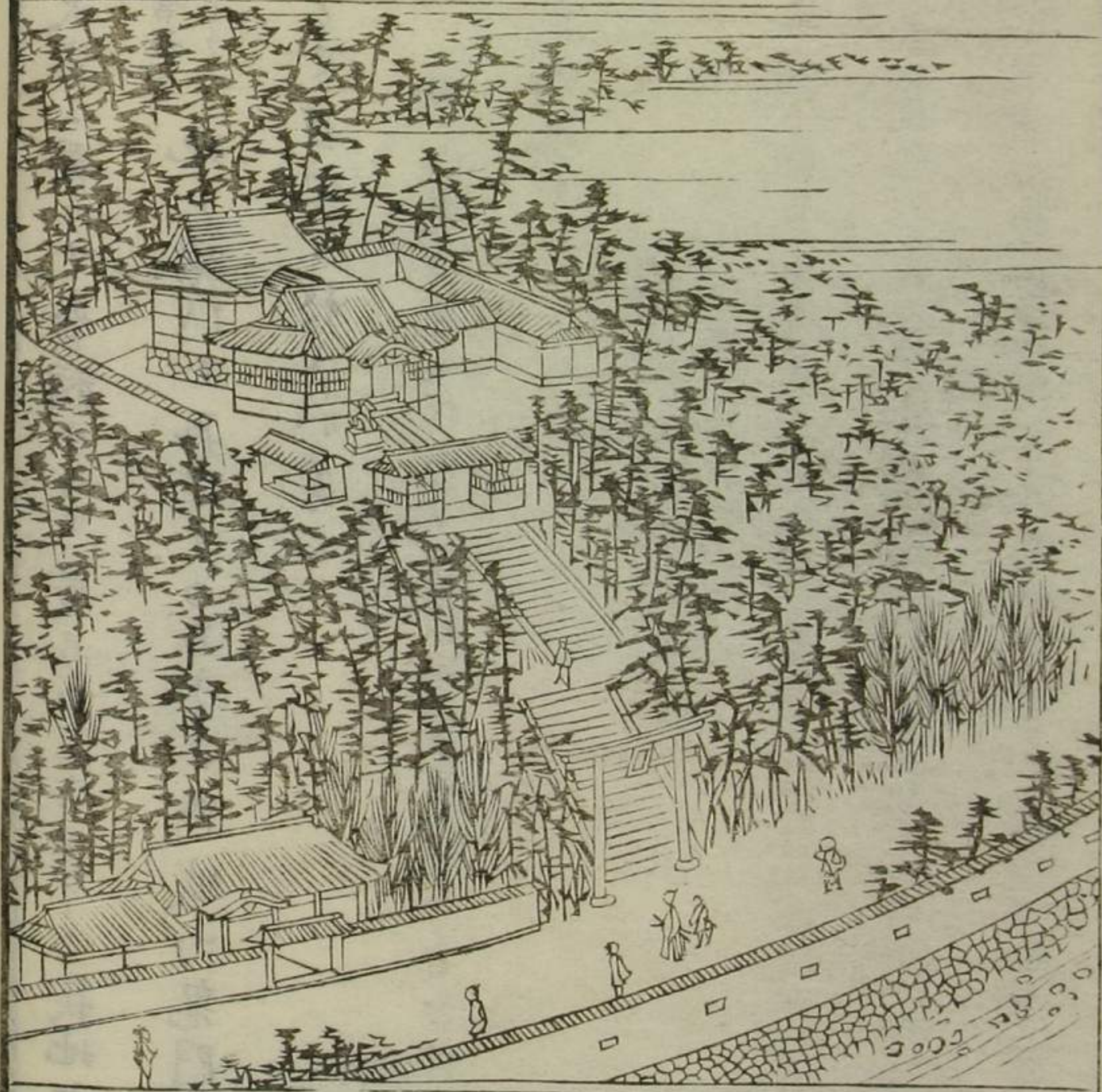
和年中ノ火災ニ罹リテ廢頽すのち慶長の末ニ至リテ萩地古  
春日に今宮社の地を賜ひて再建すのちまゝ御城内鬼門守  
護の爲とて当処ニ移されしとるこ

宮崎八幡宮 御山東の片へにあり 太宮司吉屋氏神主白神氏  
祠官安藤氏奉祀す

祭神 應神天皇 仲哀天皇 以上四座相殿  
三女神 神功皇后

社傳ニ云嘗社ハ往昔治承年中因幡守大江廣元相模國鎌倉  
鶴岡より甲州宮崎の庄へ御勸請在り御神あり天文年間に  
至り隨浪公元春石見國江の川御先陣とて御勝利を得むひ

宮崎八幡社  
満願寺



十六

灰  
西  
屋  
屋  
反

小  
屋  
片

一 時何所よりともなく御燈より小石飛ひかりけるを怪しともお  
かしませむをば拂くせて二三丁をも過させむのこまき小石御燈より  
飛入りし是を足るべにたとの石よりけりこ奇布事之とて此  
度ハ石より印して捨させむひやうくに一里計りも御馬を進ませ  
玉ふに怪しきれ今の石より御燈より止まりぬこいひりたるこ  
とよやと尊慮常ちるはおほしき後者の儔もみあけ奇  
異のたむひをなすくく是より依て随浪公情惟ひひ宣させ  
けりハ昔人皇十七代仁徳天皇の御宇豊前國宇佐郡馬城の峯  
の尊神石体権現黄金石と化現し皇城を輝しむひし奉承り

覺えよりさる瑞祥を以て考ふれはこれ我々常に信心する所の  
甲州宮崎の庄八幡宮の擁護ちるへして即て社を安藝國  
吉田へ御勸請在て御燈にへし所の石を御相殿より齋ひ祀り  
むへり夫より後御尊敬昔に倍しむつりと云後慶長十三年の  
所へ御遷坐かより本殿拜殿修造結構を盡せり  
社宝 鞭一 廣元公より御相傳よと元就公より御寄進

御袋表赤地の錦うらうのめ打紐漆ちるか四つうち  
真紅管真黒塗上箱檜木蓋の上金粉よと書附あり

具足一領 勝負皮色浅黄威

太刀一振 菅蒲作り

御再建立棟札左記す

九百三十  
余字畧之

豊豆碩俎 祭祀萬年 大保國祖 德齊豆糸

防長二州大守毛利大守從四位下行侍從兼長門守大江吉就朝臣

二州執政毛利外記大江就直 普請奉行井上源右衛門就目

同手子 中山忠左衛門 大工主頭 佐伯勘兵衛

棟梁 羽称吉左衛門 大宮司 吉屋刑部藤原重次

天和二戊年八月十五日

傳法山滿願寺 安養院と号し同所右に並ふ古義真言有部

律宗よりて防長一派の惣觸頭之京師仁和寺一属才支院八十

一字あり相傳當寺ハ人皇四十五代聖武天皇の御宇神龜  
年間の草創よりて安藝國吉田郡山に在て累代顯宗の  
古刹よりて洞春公真言御歸依よりて覺秀實幢僧都  
を當寺の住職とすむひ真言亦求勤行不退の密場を開くと  
むゆゆ僧都を中興とすまて天正年中仁和寺の宮安藝國  
嚴島御參詣の時當時住職玄仙法印も折柄詣てを宮  
御覽して其知識博達なるを察しむひ即て當寺より代々院  
家の令旨を賜へり是則永久の規模なり後慶長よりりて  
當所へ遷し御再建するり所なり

本堂 本尊千手觀世音菩薩ハ行基の作りて脇士不動明王

毘沙門天の二尊ハ佛工運慶の作る所

此本尊ハ益田七兵衛といふ人の守護佛とそ

護摩堂

本尊不動明王ハ弘法大師の作り三島郡百姓某田圃の内より掘出せりと云脇士ハ矜伽羅勢多加なり

寶物 文珠并画像

雪舟筆

本堂額 法界場の三字佐々木玄龍の筆

鑄鐘一口 天樹公御寄捨

藝州郡山満願寺梵鐘一本之事

大旦那大江輝元朝臣 家門安全所也

天正六年十一月吉日

大工備州三原住人吉井彦兵衛藤原信正

二丸天満宮

東園御茶屋の後あり満願寺の鎮守神ニ神体ハ雲谷等顔の筆の御影ニ元禄年中より所本依とす例祭二月廿五日にて例年御祈禱の御連歌執行

せらる是ハ元禄十二年を始とす

東御門 御城より東の方ニ在るを以て呼ぶまゝ世俗時打

御門とよみそハ御城内ハ更にもいとに諸役所其外へも漏トキ越

を知らしめんとして此櫓に太鼓を置れ曉の六ツ時ニ是を打て

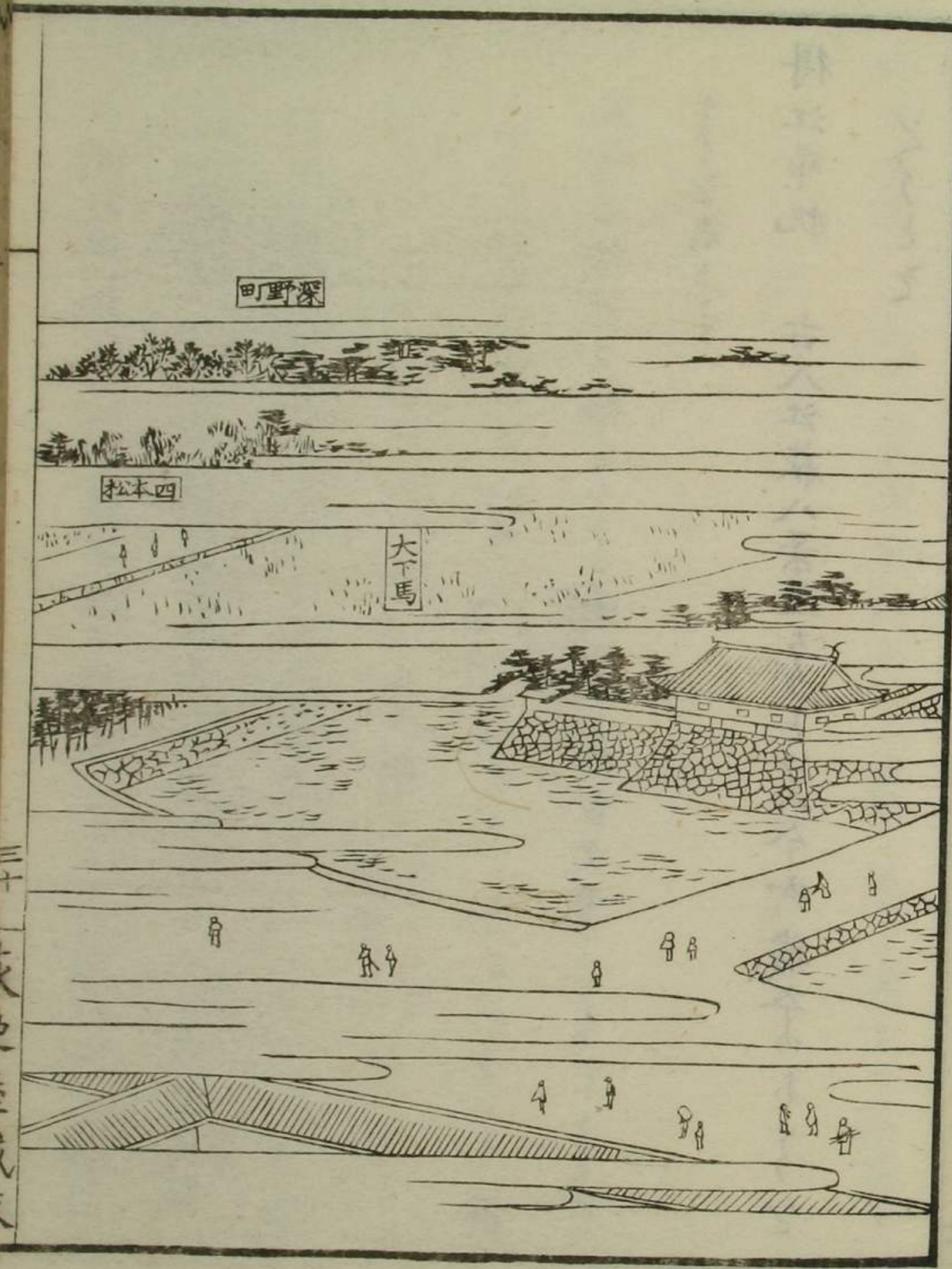
御門を開き暮の六ツ時ニ是を打て御門を閉ちさせむ

此太鼓ハ羊の皮を以て張るるものにて銘ニ大内義弘とありと云是ハ大内家代々の陣太鼓なりと云ひ付へり初防州山口香

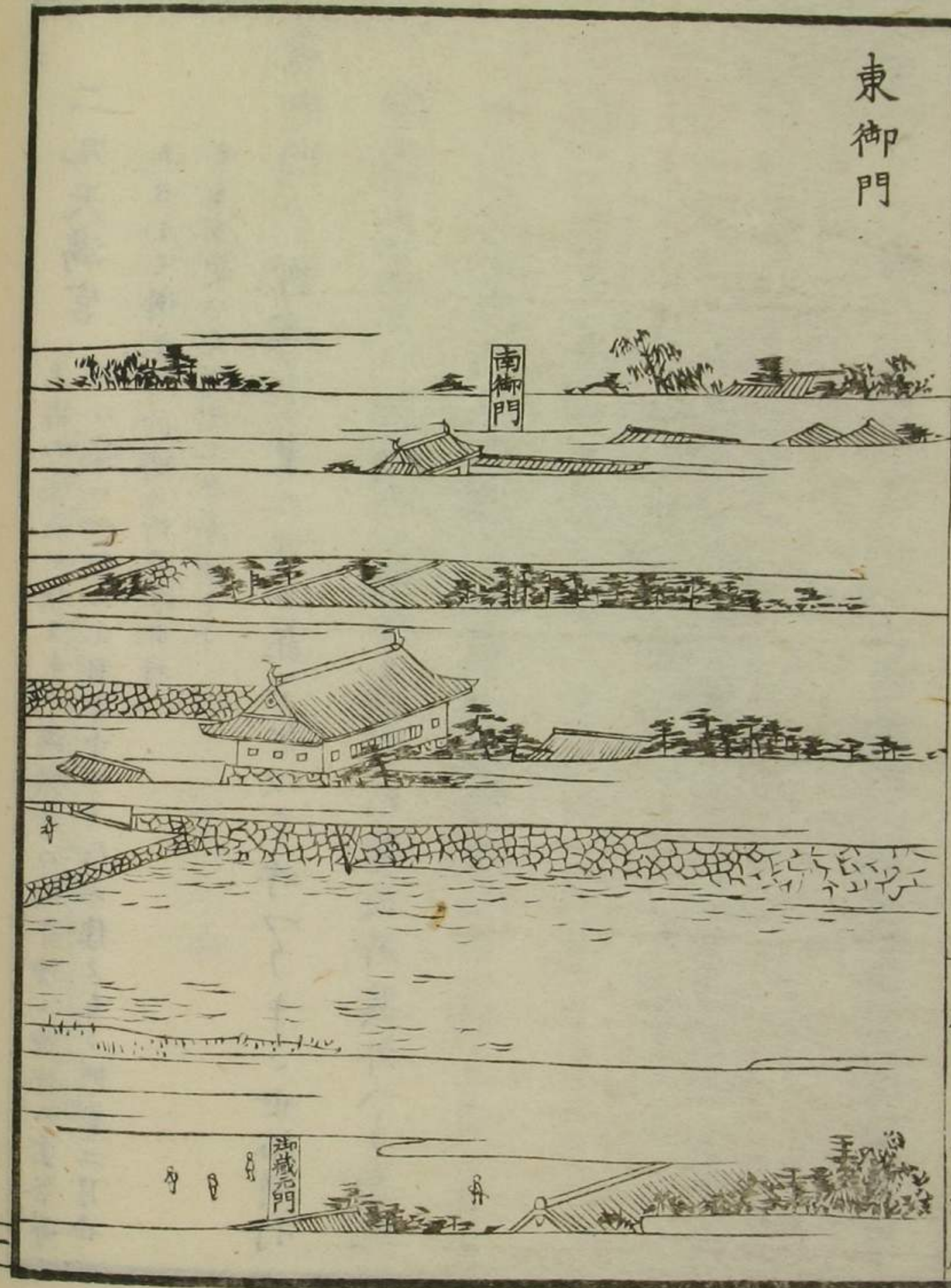
積寺ニ在るを名鼓と云とて出せしものなりと云

六くりう坪 同所より北へ二町程行て御藏許と御筒屋と





深野田  
 四本松  
 大馬



東御門

南御門

北御門

東御門  
 南御門  
 北御門



の間北御門より菊濱に出る所をいふと世俗の説に椿社  
記今教府と云所に高駒驪濱云々高麗濱云々るとの字を書け  
る古へ蒙古高麗等の船舶此濱に漂着せしと云はんはそれより  
てかく号け初らん近は公よりの御觸<sup>鐘楼と云ふ</sup>ひいとまき コクリとハ  
あくて橋本松本云々松原口<sup>當所</sup>を云<sup>ちとありし</sup>を足れをらも猶  
松原口御門と唱あつゝ適<sup>カ</sup>つゝや古文書よりてまとの  
まを志す

得江帰帆 古八江萩八景の一ちりとらみ今御藏本のあつゝを  
しつゝとそ

阿武松原 同所松原口御門外より菊濱に連ちる松原を  
いへり世俗の浮説まぢくあれとも未だ證とすらむ此を見  
す古き説不當郡大井村湊と云ふ濱辺につく松原をいへり  
といふ信まへしされハ此萩名所の外ちれといへりうよる所  
つれも姑く茲にのちをむう阿武松原の種を根引いで  
當所へ裁させむいへりといひ傳ふるにまうせらるのこゝを杜撰の  
罪免し給ふ

<sup>名所雜記</sup>  
松原 阿武郡より萩城より三里とあり北の方海辺  
より眺望元双の地あり

三十一  
上水  
地  
蔵  
城  
版

倭名抄

阿武郡 阿武云々

名寄

長門國阿武郡松原

千載

もかきやあらしはくし年を確てりともあはれ阿武の松原

権中納言

経房

金葉

陸奥のねりひのふありきうららにうらあひのまひ原

太宰大貳

長実

拾玉

さあはれんつらうり糸やかくるきうらにあはれつら

慈鎮

夫木

掃くほりみても程たのめとやま侍にありて阿武松原

奉經卿

風雅

そりほくはねてのみそらうらとと青ゆね阿武の松原

修理大夫

顯季

詩う為り阿武の松原名をとめて我よ兼西よ色松やみ茶葉

大納言

良教

おひひまいつらねり葉よ阿武れとこのむあふのや川をう

妙光寺

大納言

きく見れも阿武の松原やねあけて指月の山よのころ月かけ

西行法師

あつちう阿武の松原うらわけてあひきの山い何とちうん

よみ人不知

明應四年十二月十三日長門國住吉神社法樂百首

逢會戀

果ハかくつれさき色此有ゆらうかをや一夜の阿武の松原

宋世

この集板よとじめくきよめ

阿武松板

許とのまにうらあふのさうハをさよれら世のうらもほの松風 田中芳樹

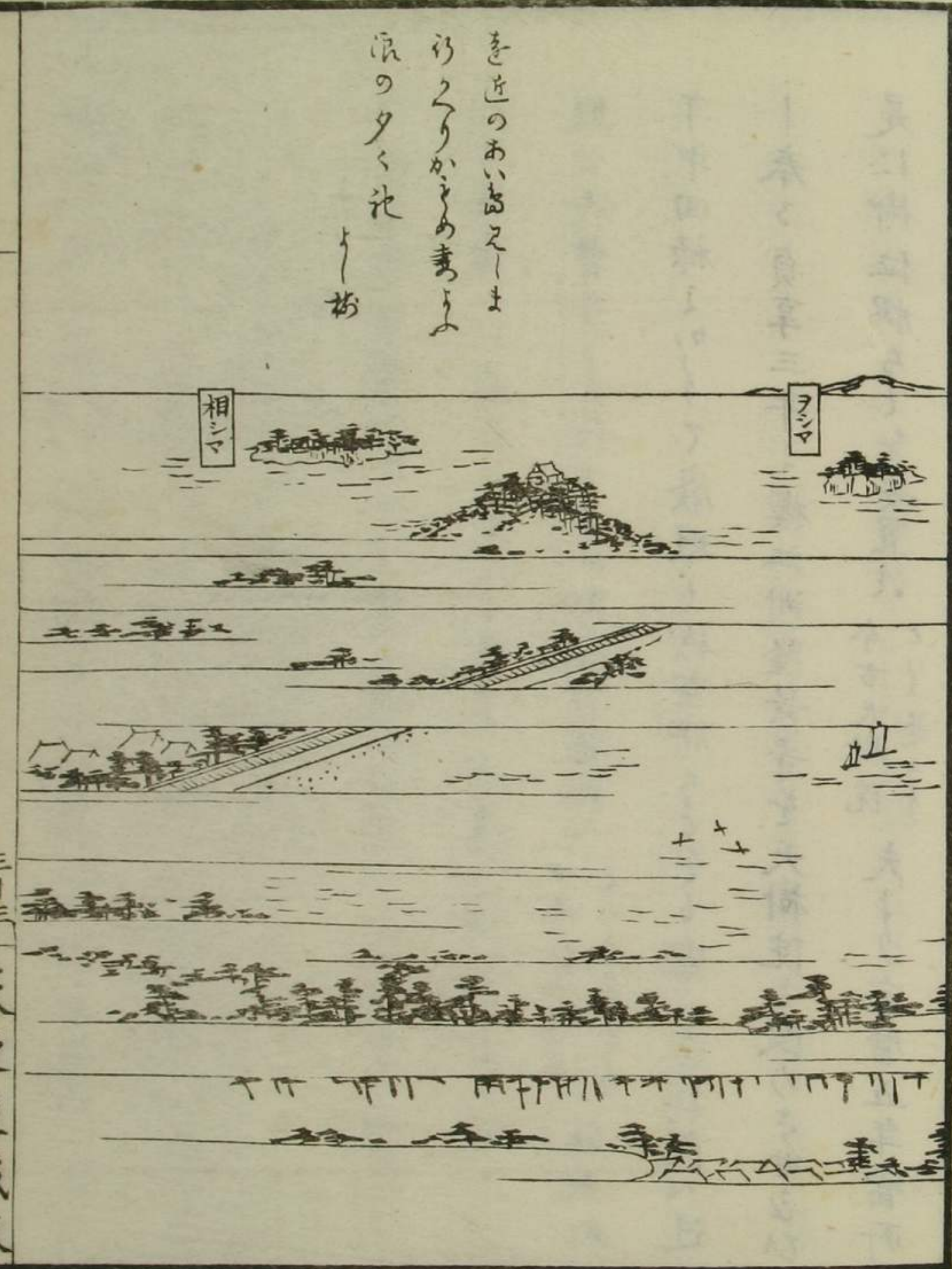
沙麓山天樹院

大下馬よりり平安寺と号に京師南禅寺派の

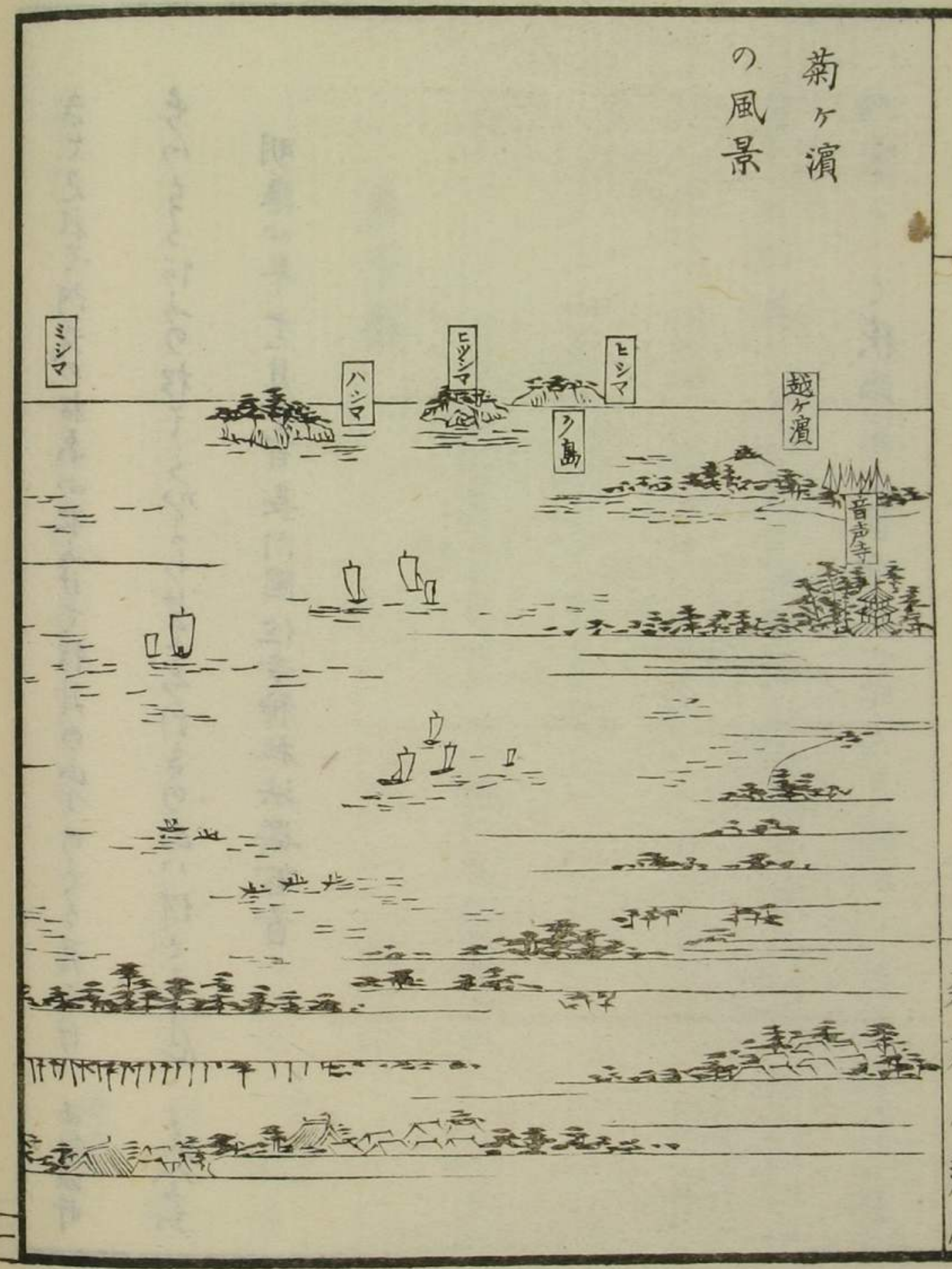
禅窟よりて萩臨家三箇寺の一字あり開山ハ前南禅言如圓

阿武松板

遠近のあいだへ  
 りくろかきあま  
 浪の夕ぐれ  
 一樹



菊ヶ濱  
 の風景



三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十

三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十

導大和尚と云寛永十四年九月寂す 寛永年間 天樹公の御菩提所として

御草創より道場として防長兩國臨濟一派の觸頭と定めさせ

る天樹院殿御法号ハ都紫野大徳寺住職玉仲大和尚の謚りきり所として即御寺号とせられり

本堂本尊聖觀世音并ハ惠心僧都の作りて脇士不動毘沙

門の尊像ハ行基井の刻する所なり寺傳云曰なりめ當地ハ大

照公御曹子より住せむハ邸舎の舊地四本松即土居といふ是なり 後天和

年中田祿よりかりて廢壞し御靈牌をも霧口雲溪院へ遷

し奉り貞享三年より櫻江洲隆景寺を天樹院と改めさせむ

是に御位牌をも安置今古天樹院といふ是なり 夫より宝曆五年當所

へ御再創成て結構巍然として全く備えり

開山傳云曰言如圓導大和尚ハ安藝國吉田郡山常榮寺大

照國師の徒弟として諸國數箇寺の住職を徑終に當寺より

して寂し始言如和尚京師南禪寺より住めり一時博達知識の

名高くしてかゝりし 後水尾院より僧綱の官に任せさせ

むよ後當所へ下り一時勅額を賜りぬ依てかゝり

れし詩二首を賦して朝廷に献し奉り此文藻りしを殊勝

らりし 獻感斜りし即てその褒賞として防長一

派の棟梁をとりされりといふ

天樹公御院号之頌并序

雲巖 中國藝州刺史大江氏朝臣毛利巨擘黃門  
輝元公作將伐朝鮮國攘斥大明國功成歸國矣一  
代英雄後世遺名加之曾咨問佛祖公案愚決擇生  
死事大矣頃者遣遠塵染緇山八子需諱与字愚不  
獲固辞称法名於宗瑞号道称於雲岩扁院天樹因  
製偈一章解厥義伏以所祝者為繁榮遠大壽矣  
中岳宗山大一丘 皈欵出岫又求由  
主人公萬里侯相 猛虎威風蓋九州

慶長五稔良月如意珠日

前竜阜玉仲七十九齡書于黃梅院

御廟

本堂の左後より五輪塔ありて殿舎の内に  
安置し平日簾を巻てあり正月遊爵豆を供す

祖師堂

本尊達廣大  
師を安ん

釣鐘銘

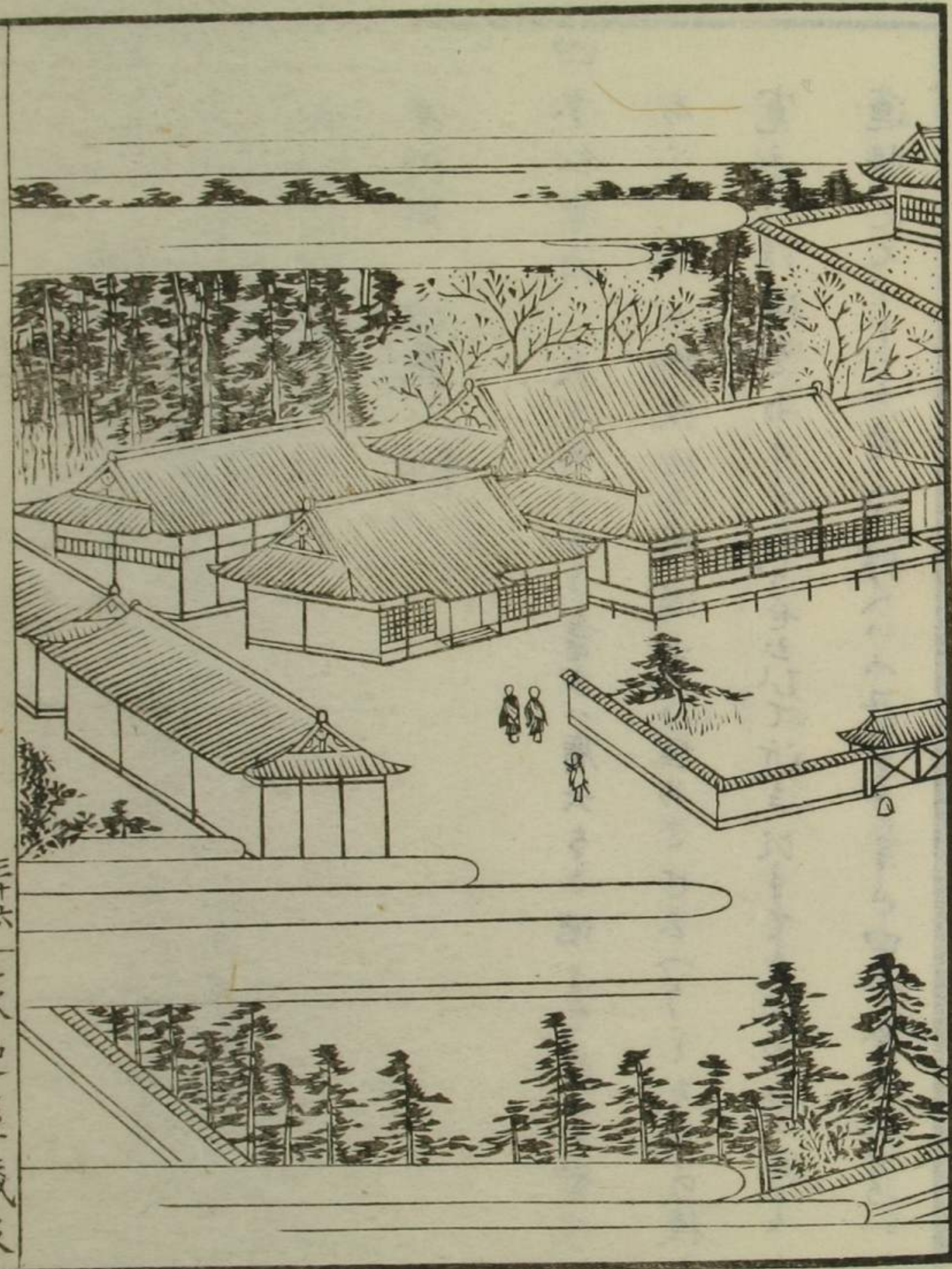
貞享丙寅四月廿七日兼政毛利市正就直治工郡司喜兵衛  
信安 天樹四世天巖圓元謹書 凡二百三十余字畧之

寺宝

涅槃像一幅

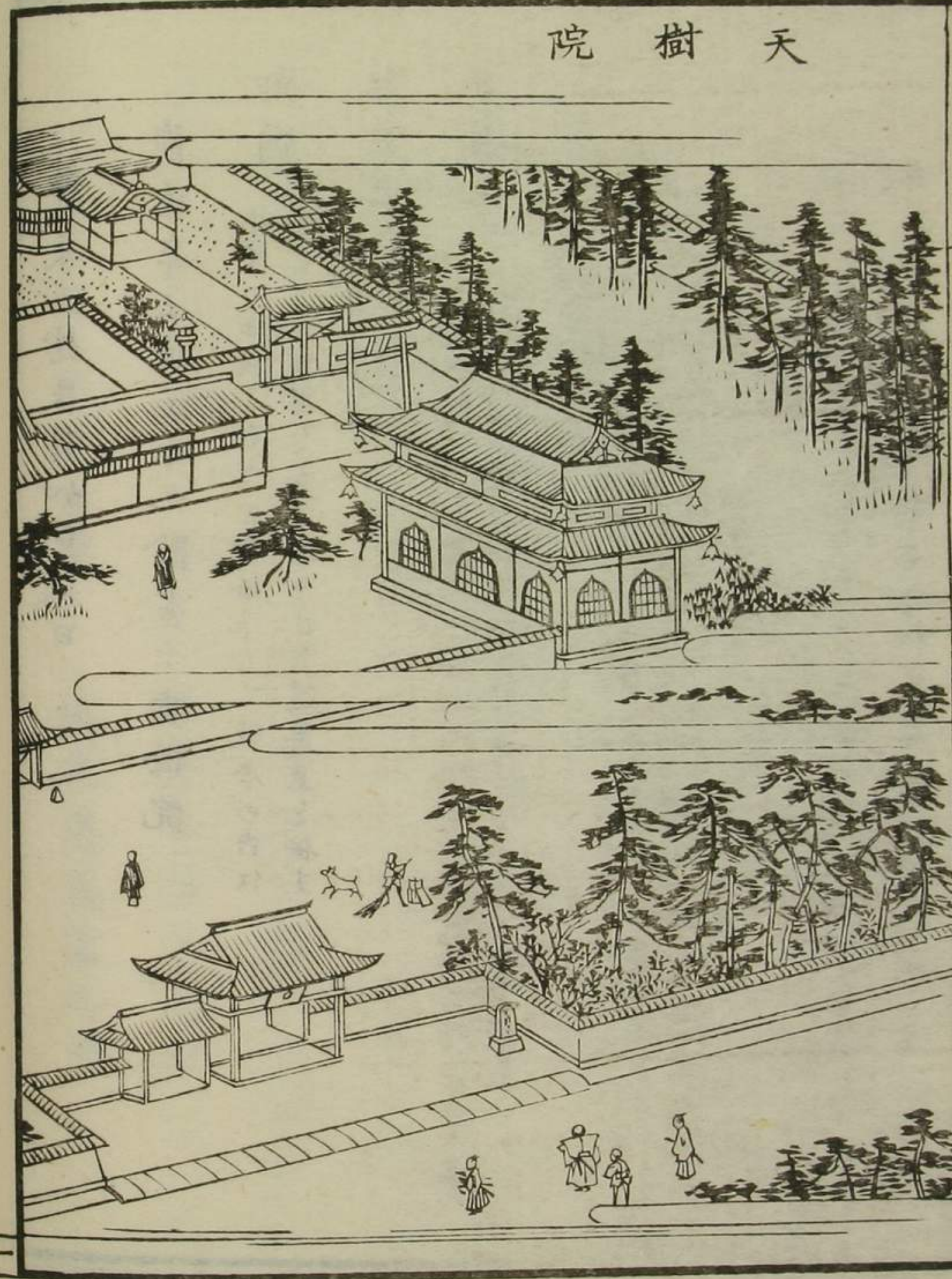
絹地にて唐画に長さ二間横八尺五寸昔山口香積寺ありしを  
當寺所建立の時寄進せしもの元禄十五年所修葺の時裏に  
委くあるされたる文あり  
畧して是をのす

此跋提遺像者永享四年壬子仏涅槃日沙門慶良募縁  
寄附于防州某寺寛永之初某寺罹地毀之數是故



三十六  
 上水  
 西  
 屋  
 歲  
 反

天 樹 院



上水  
 西  
 屋  
 歲  
 反

移于當山云々 維時元祿十五年壬午

沙麓山五世宗琳拜書

圖國執政佐世主殿

寺社監護

宍戸八郎右衛門

井原彦右衛門

其他什宝畧之

本門額

沙麓山

開山  
華

四本松蓮池

大下馬ニあり舊古ハ廣大なる池ニて葭葦繁茂

あり一御改地の時過半ハ埋めさせむつりとそその後

寛永の頃蓮をあまゝ栽させむして近き以來ても池のくまよと

蓮根見え一と老人の傳いぬ所なりまゝ四本松と称せらハ

いりへより四株の松樹ありて枝葉蒼々として廣らるる

しとぞり

寛保の年寒威烈しくてこ雪五六尺も積り枝折れて今のやちりしとぞ

古老云四本松ハ鞠の

かりの松といふやありされハ蹴鞠の為ニ植させむしものあら

んといつといふり

深野町御馬場

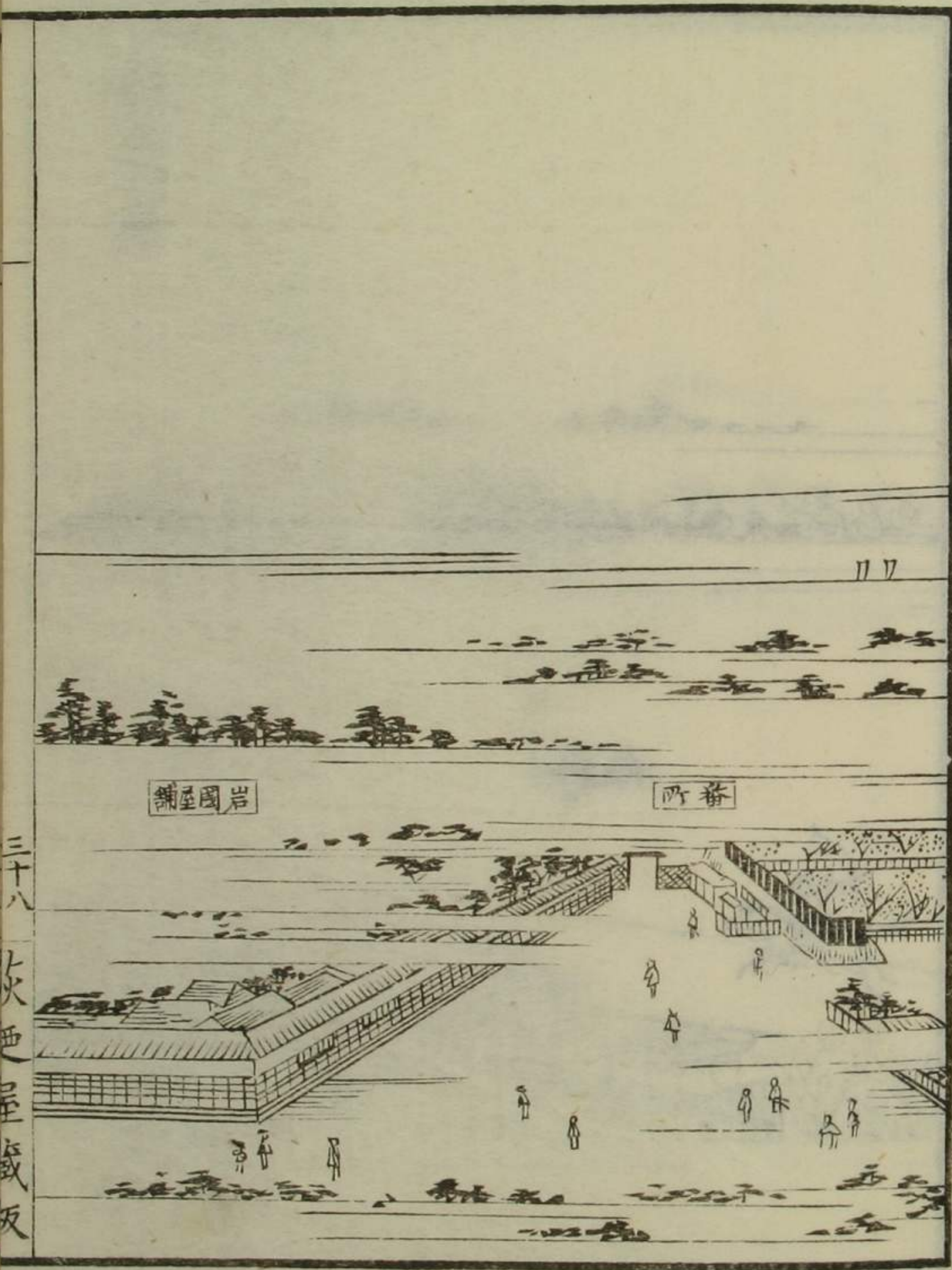
御居城なるころ以前深野露竹といふ町人

住居せし舊地ありよりて此号を称す

今魚棚町々人深野何某といふもの先祖を町人

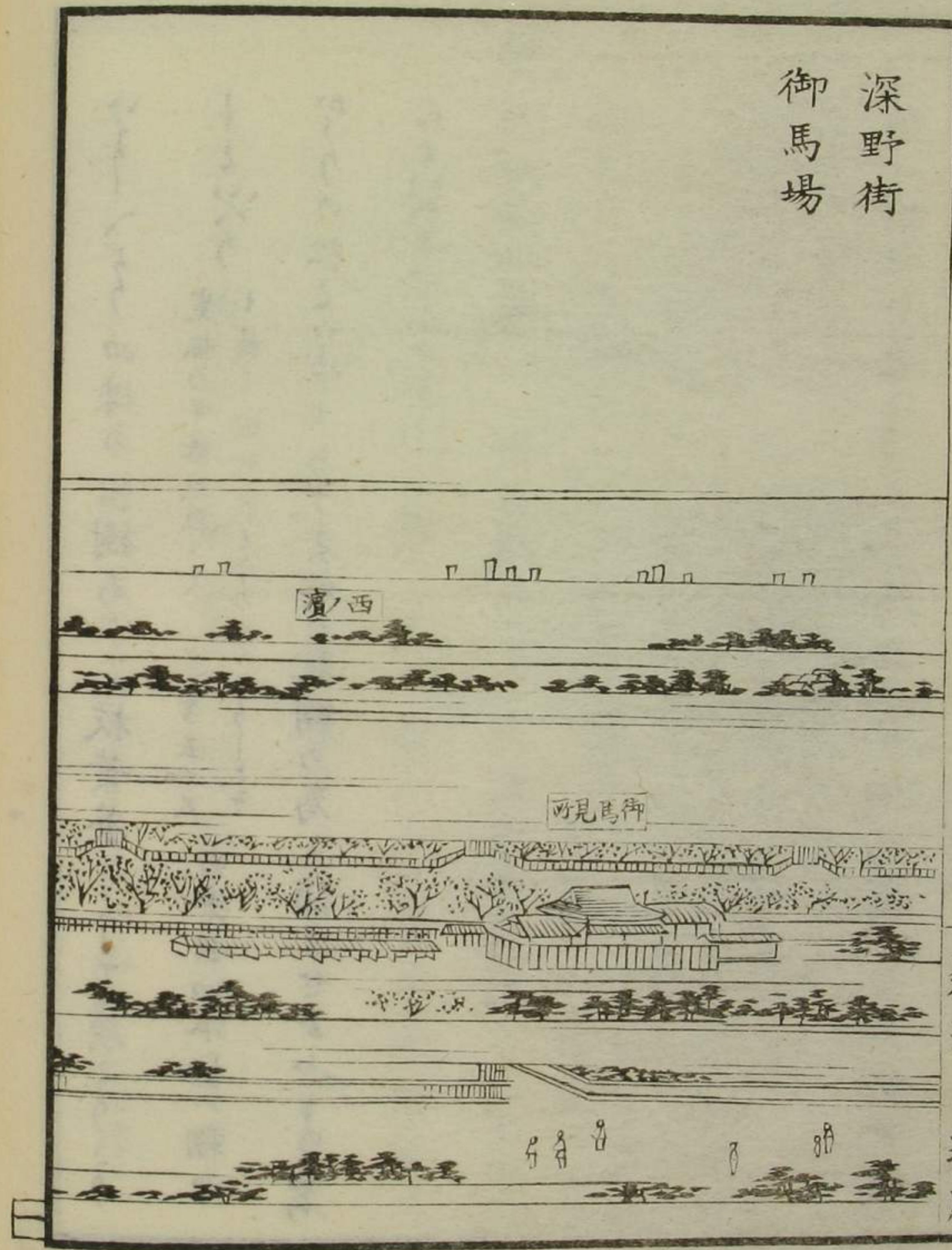
ハツトよき家まがら長門金櫃ニ曰昔考地ニ漁人五家住居せしとこそ朝鮮沖陣のとき舟子水手をして藝州より沖供して来り当地ニ住居す後考地を開くせむひくる時濱崎石や町ニ徒さる今獵人所といふ号をよりと真なるかのむれハ元々前の産といふ

後の松原を西の濱といふ明和二年御馬場となりて御門番



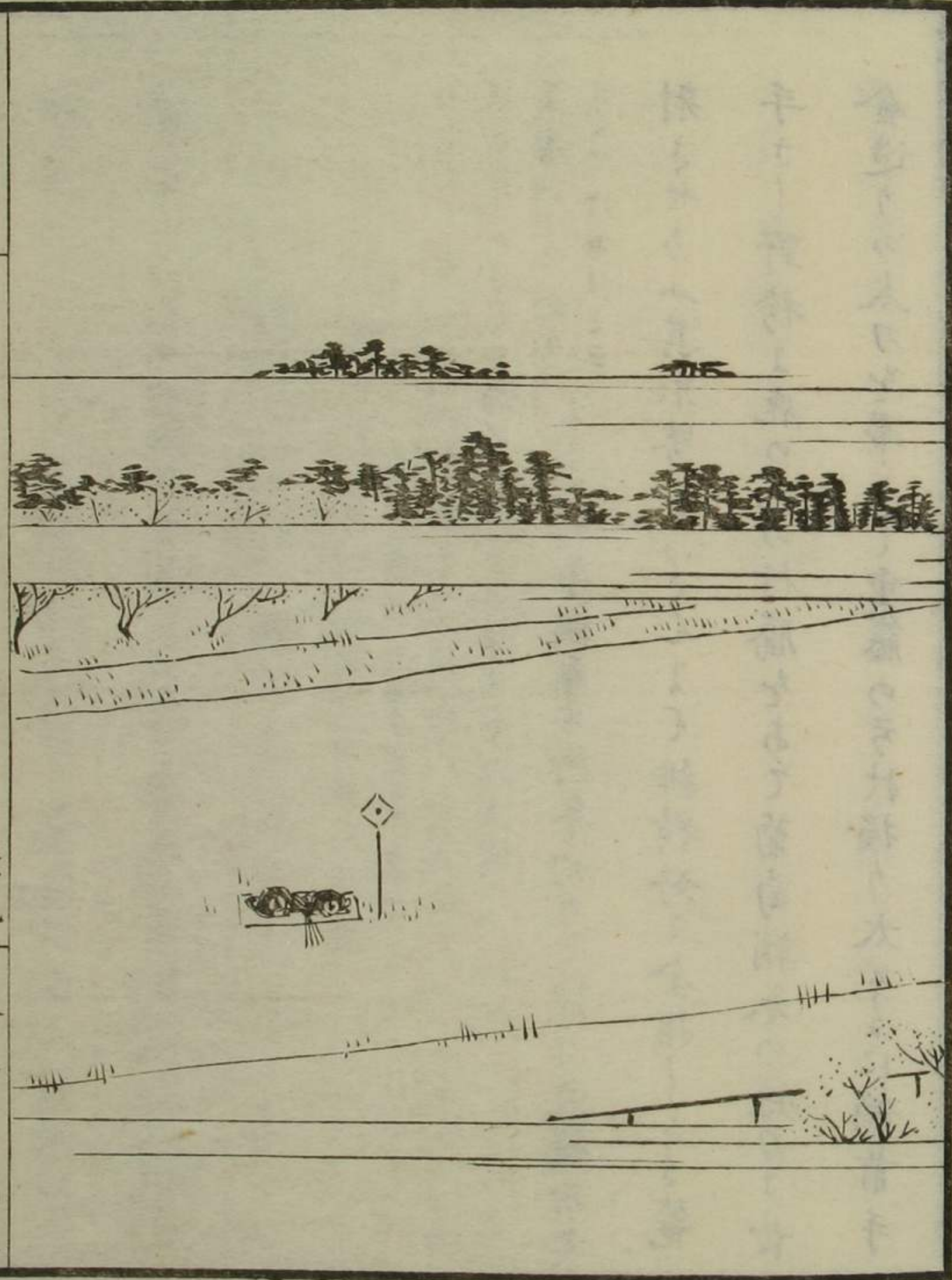
三十八  
 大  
 西  
 屋  
 蔵  
 坂

深野街  
 御馬場



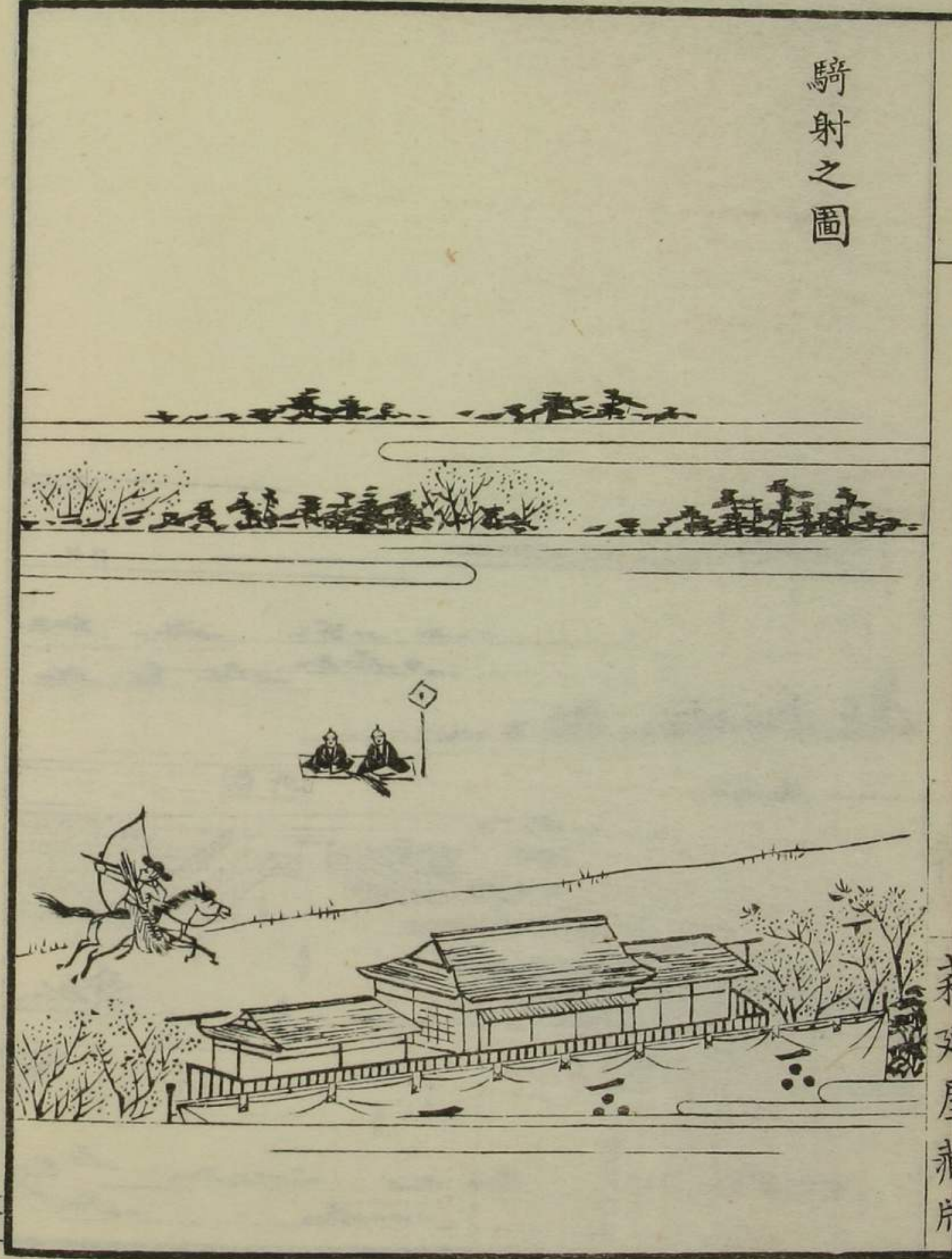
新  
 延  
 屋  
 蔵  
 坂





三十九  
...

騎射之圖



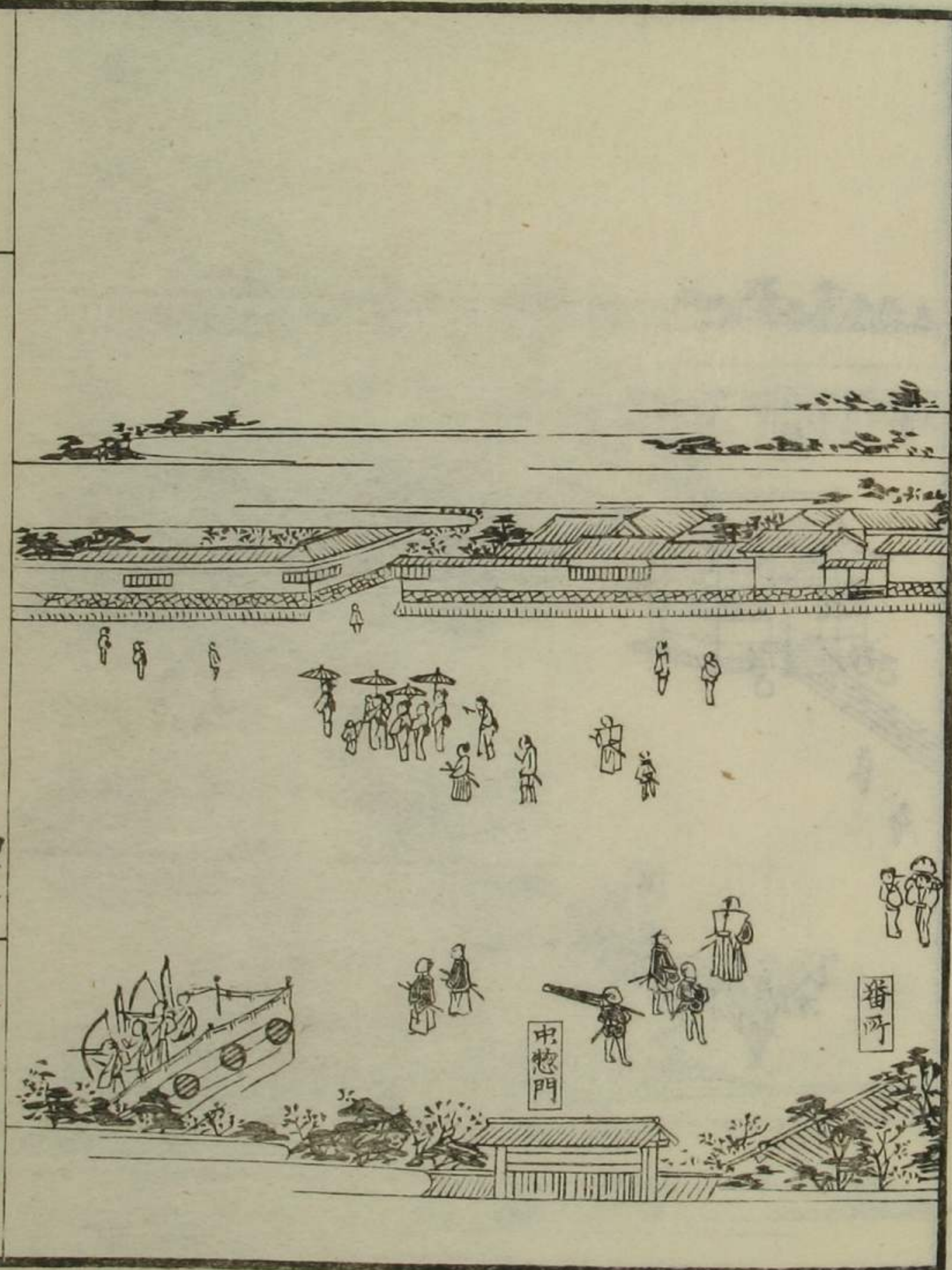
...

所を置れりゆのち御馬見所結好に造らせり御馬場長さ  
 數千歩して西側の封疆に春の柳櫻秋の萩萩をうゑ又  
 中より埒を結俗語射封示春秋の西度より長前の射割とい  
 いて式の騎射あり因云沖考家の騎射ハ 英雲公の時絶るを  
 與一廢れしを継ぐせむいて弓馬の古実を開く  
 せむよとく其後邦憲公の沖代江戸小室原家と傳ふる所をも兼  
 流ささめりゆいて藩士と傳ふる即ち今沖流儀の沖流射といふは九  
 宝曆比より起りまて沖流と云先年洞春公御年回のより流鎗馬を  
 射させむ其形勢をいふを緋精好に金摺しる籠  
 手さし野袴に鹿の毛の行騰をあて葡萄鞘卷の短刀に黄  
 金造りの太刀を帯きて重簾の弓此握り太るに鎗箭手

扱ミ陸奥達のいといまめり駒に打ちさかりかけ声ハ萩萩を  
 ちりし綾蔭笠ハ花柳に映るるありさ々實に太平の武美とい  
 ひつへ

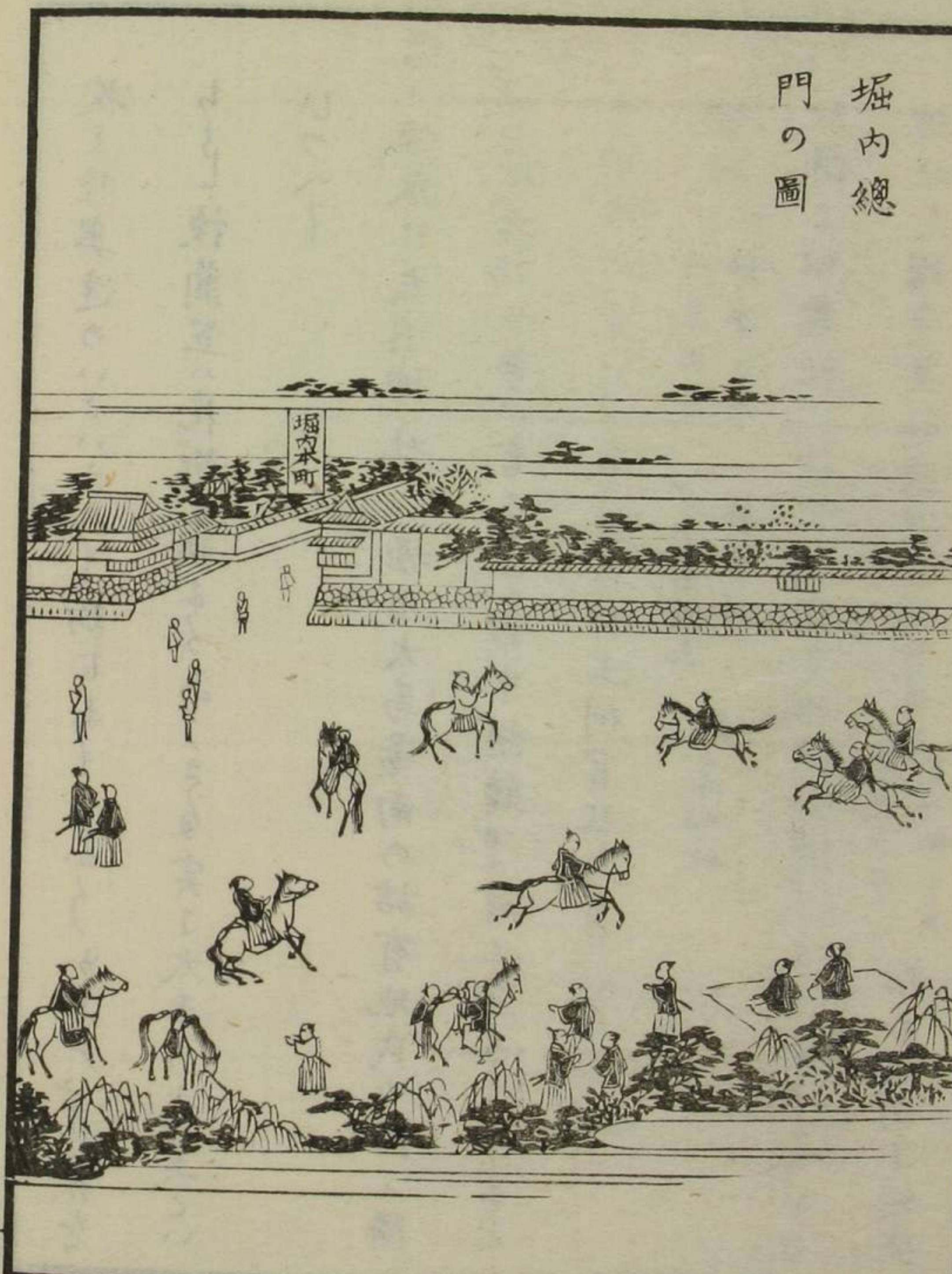
正一位春日太明神社 堀内大馬場南の詰有地氏の後に隣  
 る萩五社の第一宮より市中総鎮守産土神より太官司  
 中麻原氏奉祀寸贊辞の神主祠官社人等いと多し  
 祭神 兎屋根命 武甕槌命 以上四社  
 経津主命 姫大神  
 社傳に曰當社ハ往古大同年中大和國奈良に在り春日の  
 神社を國守其勸請せし所なり  
 國守の事ハ 初め江向に鎮座  
 夏の部云

四十五  
 大  
 一  
 一

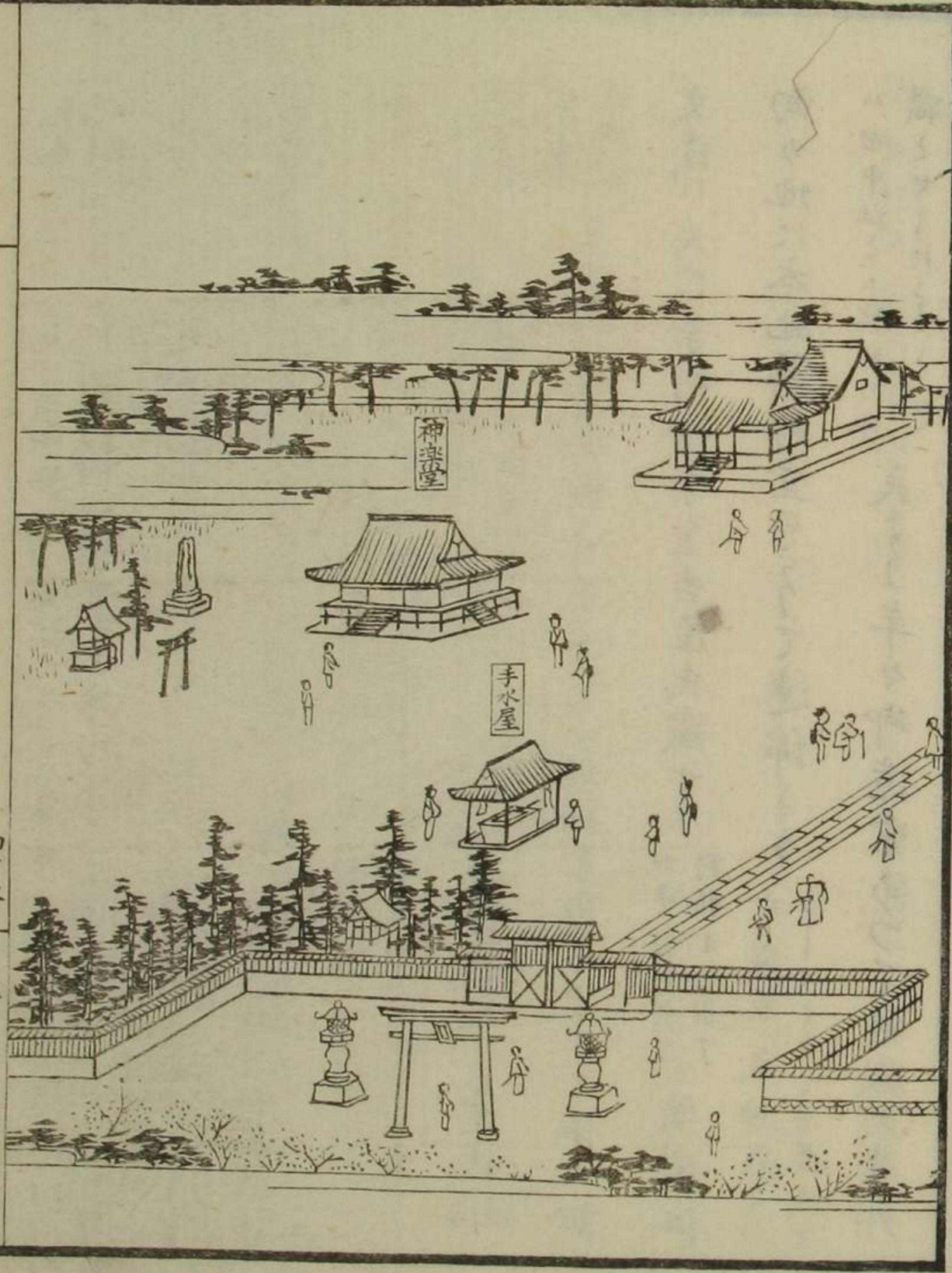


四十一  
 中徳門  
 藩所

堀内總  
 門の圖

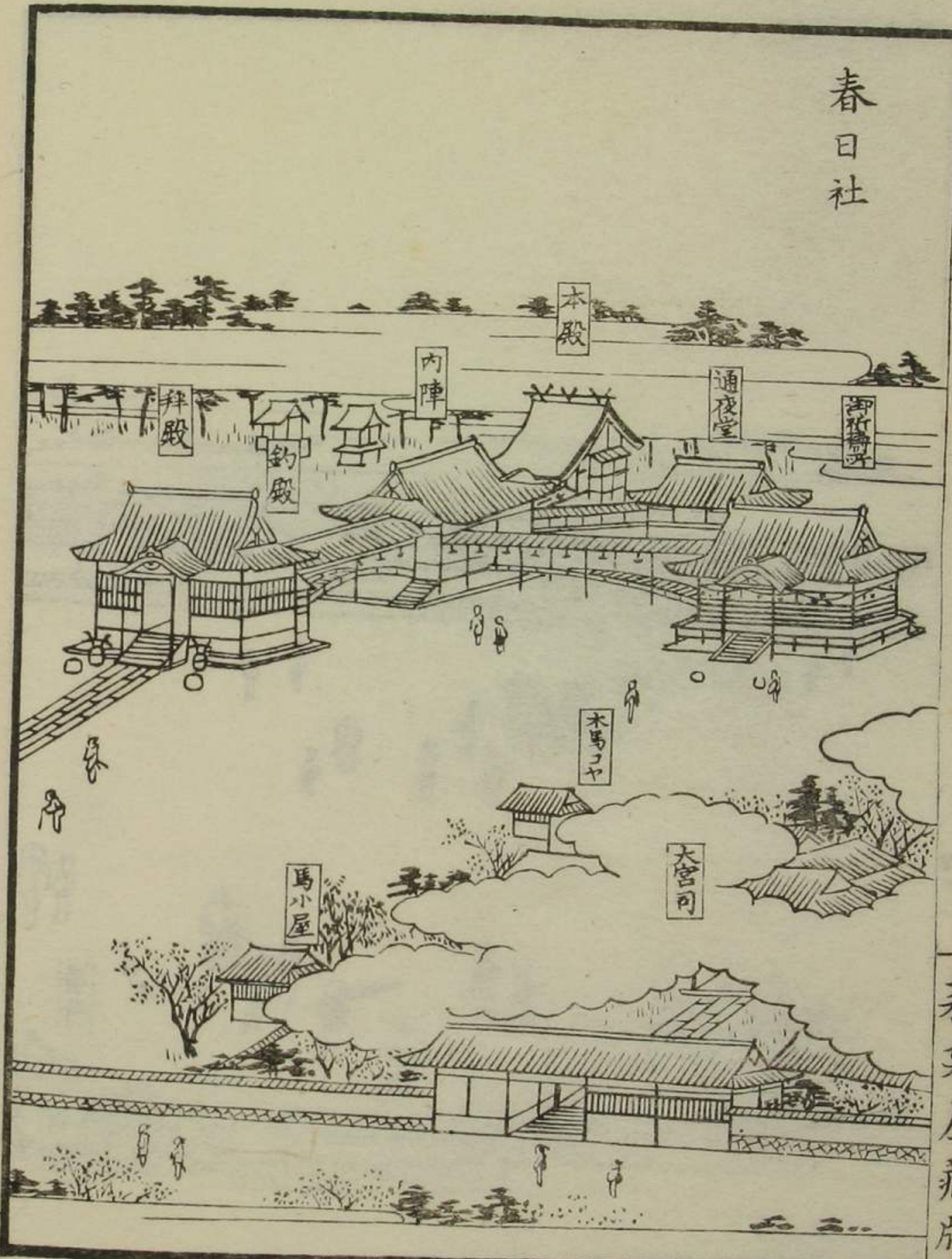


堀内町



四十二  
 春日社  
 御本殿  
 御内陣  
 御拜殿  
 御釣殿  
 御通夜堂  
 御御幣所  
 御馬小屋  
 御大宮司  
 御木馬ウマ

春日社



春日社  
 御本殿  
 御内陣  
 御拜殿  
 御釣殿  
 御通夜堂  
 御御幣所  
 御馬小屋  
 御大宮司  
 御木馬ウマ

今古春日といふ伊与社り地是也 又云下土原井原やき社の内  
を旧地といひ其比ハ神主吉屋氏祠官中津江氏城村氏より けて

慶長十二年天樹公のおかめしめて堀内の地に御遷宮ありて

萩総鎮守と仰うせむい則小南宮内太輔を以て當社の太宮

司とせられしなり 小南ハ初め波多野氏より清光夫人お南の四方とす  
せ一町宮内木補内附ありて小南といふ名字を賜り

よりといふ後當社の神職とすなりよりまご中麻 其已前ハ吉屋氏  
原に改むこそ安藝國中麻原より出するゆゑなり

中荒神 太官司として安養寺とすいへる社坊もありしを依て証

文或ハ大内家判物等を吉屋氏藏せり 田中社の所ニ  
判物お出す 猶又江

向の地に本地薬師堂のころて連綿しり 中麻原氏神職より  
りによりて吉屋氏と

ハ田中社と二社社の神 夫より年々御造営あつて神殿内陣外

陣巫殿拜殿釣殿総拜殿といふまで結構を尽されしなり

例祭ハ春秋兩度ありて三月ハ十六日より十八日まで九月ハ

五日の夜度より六日の晴の夕ニ終る尤秋祭ハ御名代奉幣使

ありて其式殊に厳格なり先御名代神拜終りて内陣の左

より着坐すありて神輿御幸の御留守代といふもの烏

帽子狩衣を着し駕籠にのり鎗傘挾箱を持せて太官司の

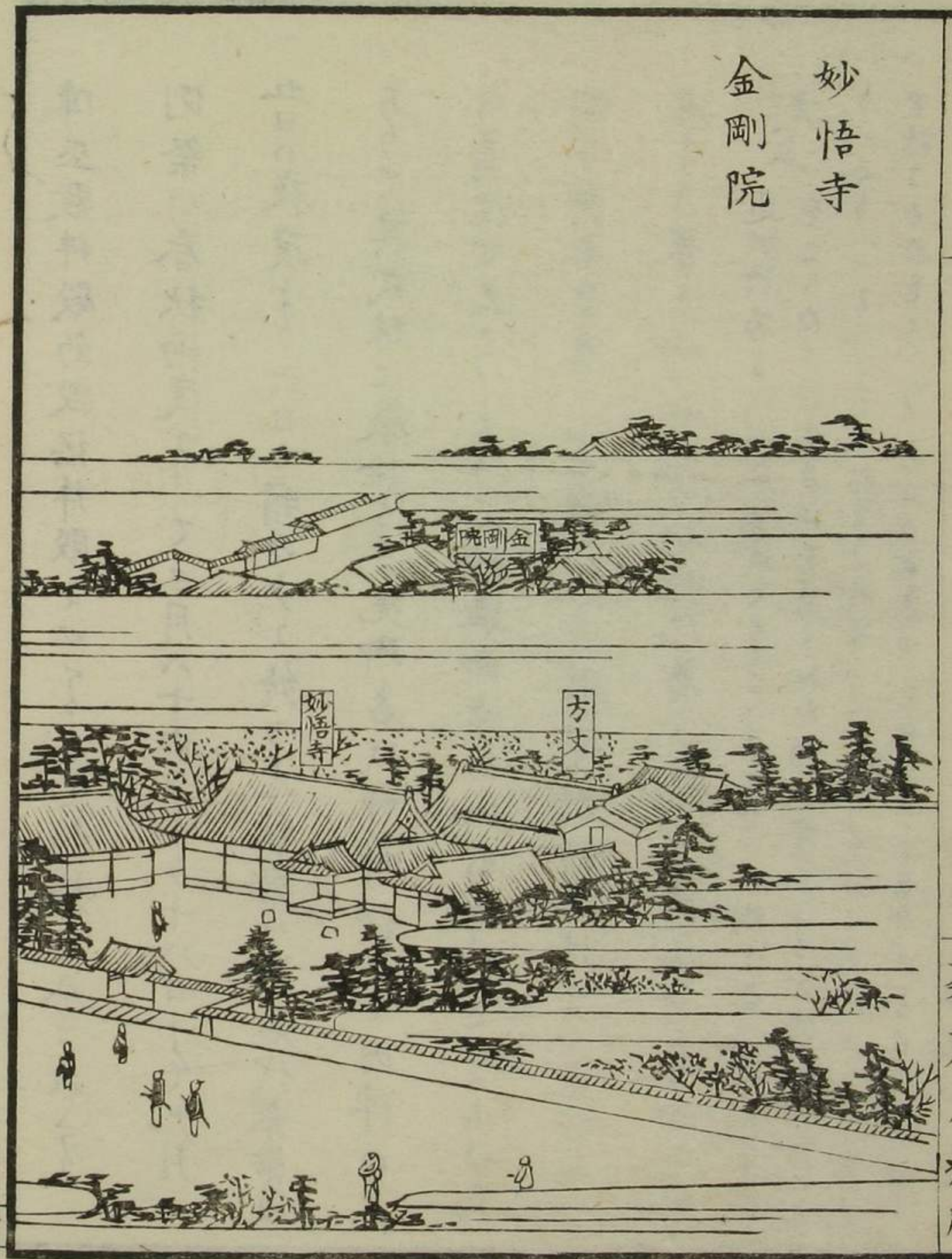
宅より参り御名代の向坐に着く夫より湯立神樂等を執

行ふ 近以所為さ代の子畧式とすりて其さ白りと残一總角の面に白粉  
をこすりぬり付赤き絹を着し袖を顔に覆ひしるを脊負ひ行くや

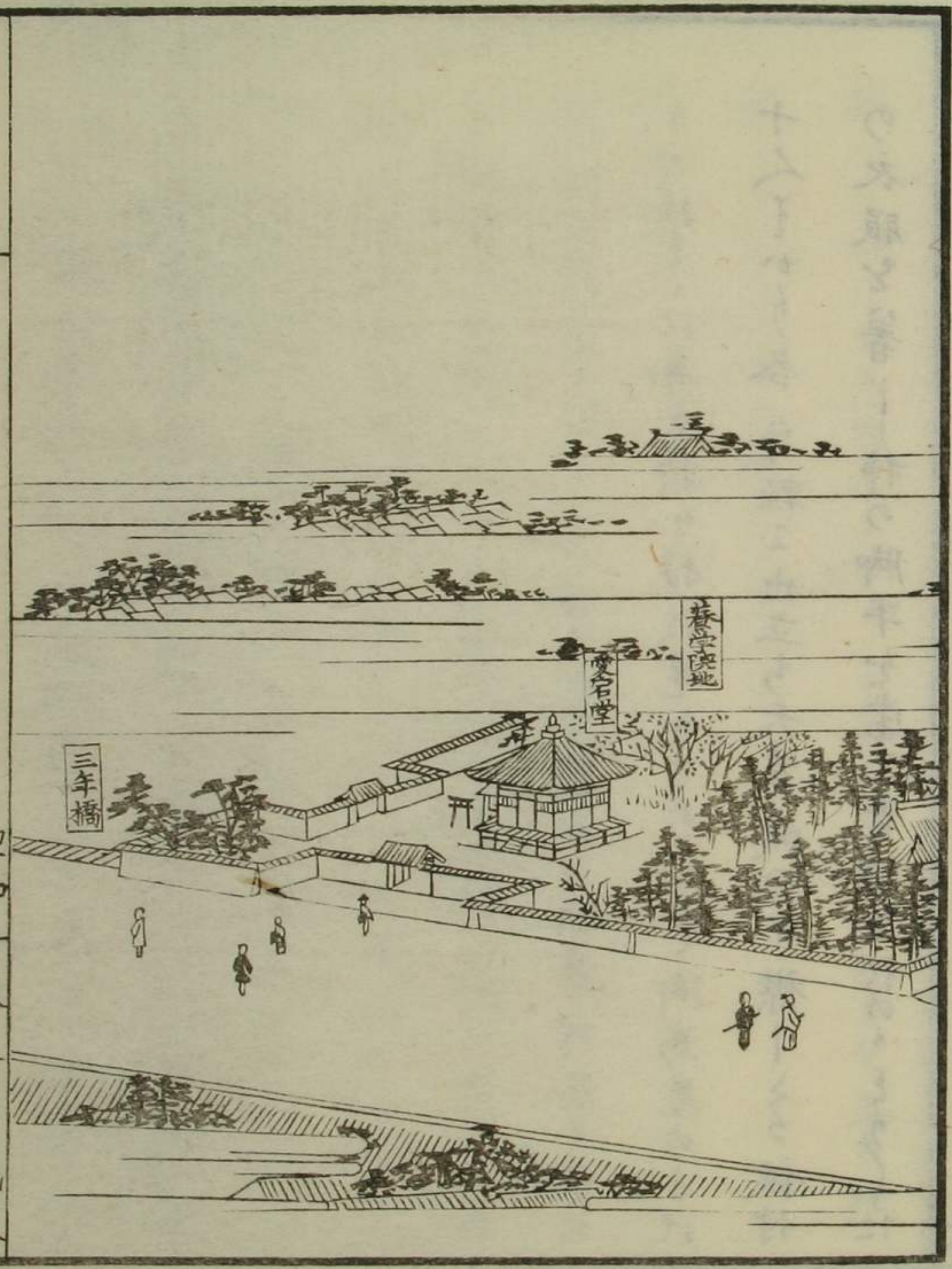
りかさも一つしたるねておたりし神事といふ粗器としてかくあきりしありし  
里諺に白粉をこすりぬり付る女をさうて春日のお留守代とすりておたり

四十三  
大  
火  
屋  
蔵  
版

妙悟寺  
金剛院



新刊  
延暦  
神皇  
正統  
記



四十四  
三十一  
大  
水  
西  
屋  
藏  
反

又さきて前の馬場において流鏑馬のやうなるものあり三  
 所に筈の的をかけ射手馬に跨り素袍やうれりのを着し左  
 右に弓矢をとり花を脊より負ひて此馬場を二つ三  
 度走らすを流例とせり終りて公より御寄進の神馬二  
 匹緋紫の厚房くけを牽出て此馬場に放つ出さやう  
 参詣の老若とあつて呼ぶて襲ふ随意神馬もれ  
 う心れまゝに奔走時を移は是をどめんとて御馬屋の  
 十人ばかり各身軽に立立ち天鷲絨の半襟しつゝ紋付  
 の衣服を著し柿の脚半を當て青竹をたのりとりくに

携へて両方の馬場末を走りて走馬を止むるを各の規  
 模ちりとすしと笑ふも堪らり

御祈禱所 本殿の布  
あり

祭神 大宮八幡宮 三王権現 稻荷大明神 神明宮 御貝八幡宮  
住吉大明神 加茂社 多賀社 荒神 平野  
祇園 巖島 諏訪 山田八幡宮 以上十四座あり此大宮社ハ洞春  
公御軍神にて安藝國中麻原にありしを慶長年間岩所へ遷し奉りしと  
そ大宮社宝蓋  
具足一領あり

繪馬一枚 地巻金箔しつて極彩色紅葉に鹿を  
画し宝永七年寅八月日画とあり 泰桓公御寄附あり

棟札一枚

奉重造營春日大明神

執権榎本遠江権守藤原就時

防長國守侍從兼大膳大夫後四位下大江朝臣綱廣

神官正六位下行宮内大丞藤原就豊

万治二巳亥九月吉祥日

文記

予万幸奉命司役  
 中付の如神前及寺  
 空國三少助之也河原  
 女伴  
 万治二年  
 輝光

少用之ぬと補  
 〰〰〰

真如山妙悟寺 同所左隣に濟家の禪刹として京師建仁  
 寺に属し本尊八千手観音として開山ハ東嶺景暘長老と  
 して當寺ハ初め周防國日積郷光明山瑞雲寺として軒を清  
 美といひ閣を送青といひ池を双碧と号けし 伽藍の遺  
 跡を山口郷柄良村真如寺に遷されし其の後慶長九年天  
 樹公の御再艸創して當地へ引せしれ妙悟寺殿の御位牌  
 所とせしれし其の天明八年回祿してりしへの傳記等詳





仁光の例不と執勢  
之成如行

慶長九年八月廿日

内大臣

是賜西堂

長遠山金剛院

普賢寺と号に同所波角あり古義の真言  
宗よりて満願寺に属すよりめ安藝國吉田郷の古刹よりて

開山理乘法印中興ハ真源法印といふ慶長の初火災ありて

廢失におよひ直ち之當所へ迂して再建せしむる所あり

本尊十一面觀音ハ弘法大師の作たり佛堂本尊正觀音ハ

銅像よりて唐佛といふ脇士ハ弘法大師の木像を安置す

護摩堂

本堂の左角あり  
ホチ普賢を安す

寶庫

金剛壽命經一部軍書虎の巻  
一部御判物等數を存す

明倫館

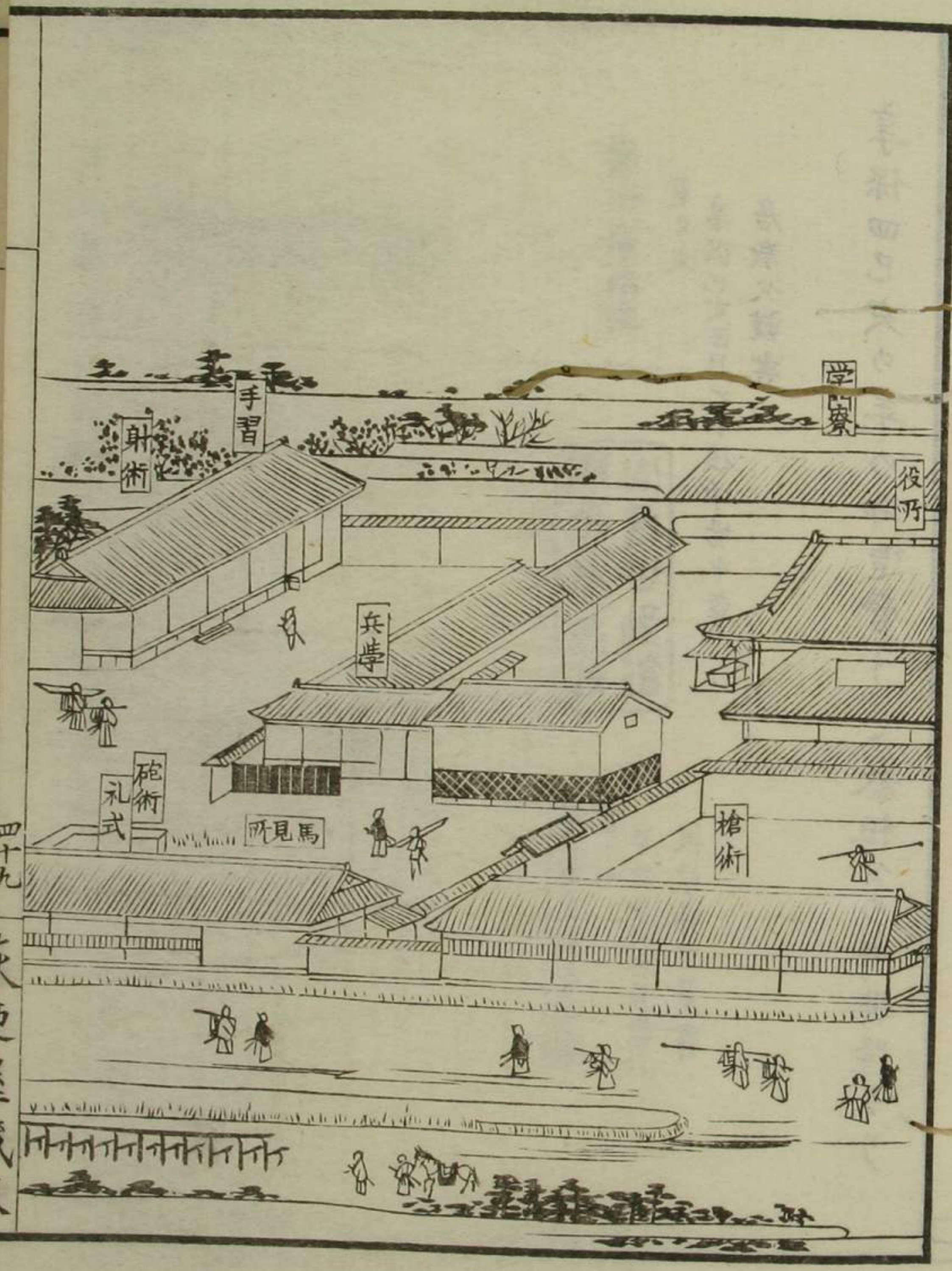
平安湖總門より内一丁目より左あり本堂木主を

安置す大成至聖文宣王と鐫る

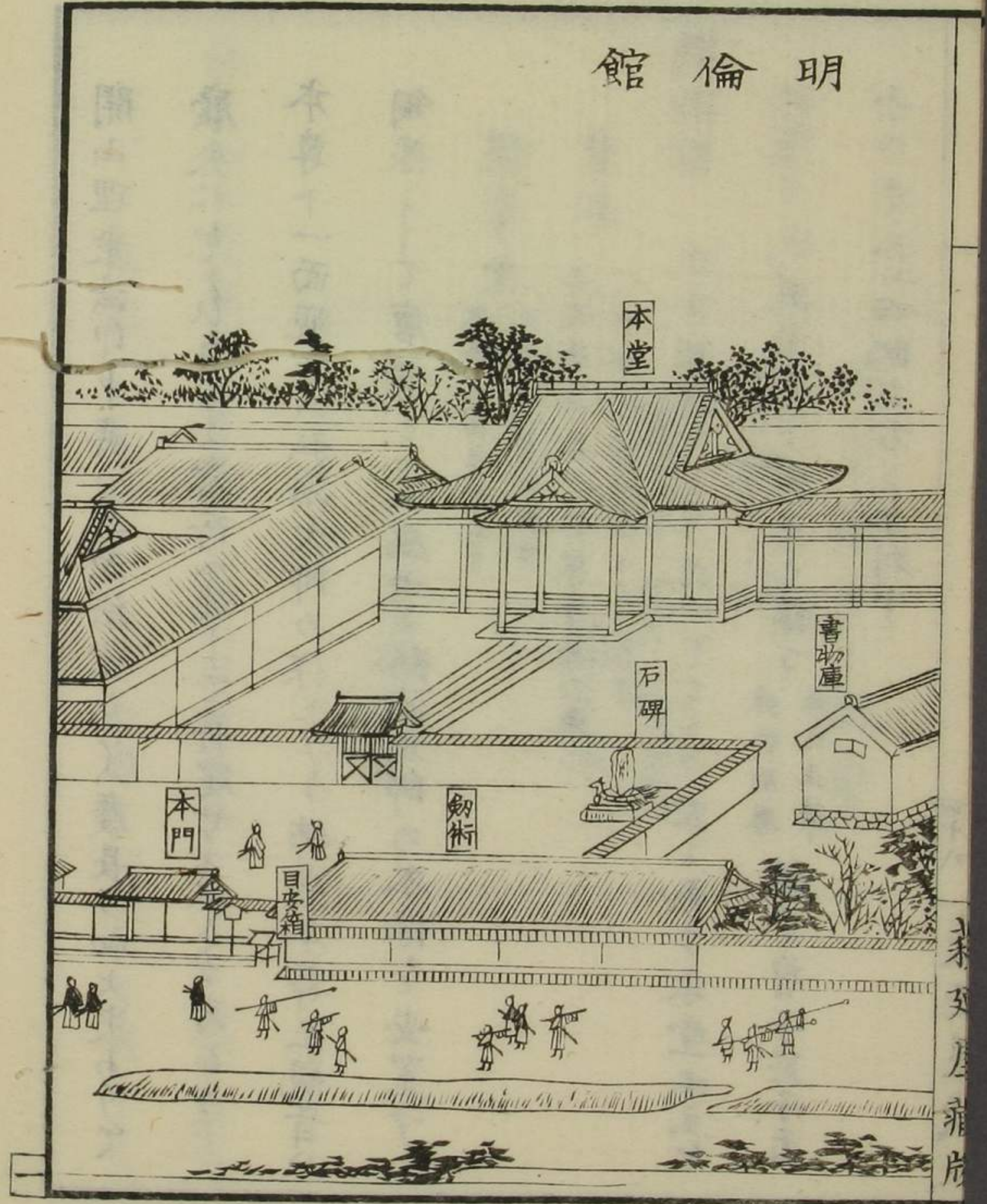
林祭酒鳳  
岡先生筆

顔子曾子思子孟

子の木主ハ四配左右より分列す



四十九  
殿  
野  
鏡  
坂



未  
及  
屋  
飛  
片

本堂正面に掲る扁額

明倫館

艸場  
居敬  
の筆

本門に掲る所

容衆

同上

黌校南廡額

周長吉乃牧  
周石山堂創

黌館及講武舎額

裏の文  
享保己亥正月之吉後學場中章  
居敬父謹書

裏の文  
享保己亥正月穀旦  
後學場中章書

享保四己亥の年の御造營して泰桓公の御興隆あり

例年春秋二仲の叙奠ハ上丁の日とす

障あはハ  
中丁の日 君公御参詣

ありて献備の式典あり且ハ養老の禮供膳等ありて物を賜ふ差あり其式いと嚴重に執行せらるるまゝ學寮ハ勿論して諸の武藝稽古場を建たれり

目安箱

本門の前左あり  
延享三年始まる

書付マカぬん  
の  
かき付さし  
年月  
四改

石碑文

錦ハ周南山縣少助撰  
書ハ東洋津田忠助筆

今侯立繼修 先侯之政戒有司錄庶績申令學宮謹教化其在國也仲春 親  
至學宮祭先聖行養老之事遵奉 先侯之道焉而有光矣今年二月上丁臨學  
行事乃命學職曰昔者 先侯有若令德貽厥孫謀其寬大矣今而不記後世子  
孫何觀焉其序次創建嘉績以樹學中臣孝孺謹奉命作文其記曰維享保三年  
戊戌 泰桓侯立十一年上奉 公朝之休命下率 先侯之舊章恭儉躬即修  
政慎令旰而食矣於是申令曰嗚呼爾國子弟懋哉勿怠 神祖創業文武造士  
載在令申我藩國敢弗承守且昔我 先侯與汝先祖經營是邦貽茲多福仰思  
勤勞不遑寧居爾國子弟進德修業答揚先德否而尸居世祿安逸惟恒淫侈放  
肆是汝辱而先祖而余亦無告于 先侯之靈祀樂射御敬業時敏 先侯之訓  
也懋哉勿怠成德建材以篤尔祐國政就也廣包廣保廣通宣揚令德將頌懿美  
率宗族巨室者老子弟以奉命也今年秋遂命有司興學宮越明年己亥正月告  
成於是二月上丁始祭 先聖四配於學實者老觀養老之道著為常典世世無  
替謹按庠序之設將使斯民納乎軌焉者也是以自古以來有土之者未之或違  
光耀史策稱頌盛德而世不絕筆也 大東學政載在延喜式目 皇都以及列  
州莫不有學焉春秋祀典取法李唐而內外異制尊卑有等其於教化之法欽崇  
之意未始不同矣中葉以來國史失官降及戰國喪亂相尋制度陵缺 先王之  
太經大法殆乎熄矣當是時也干戈為政庠黷無聞 神祖武成帥諸侯而紀政

輒徵林羅山氏咨詢時務於是儒教蔚興海內嚮風爰逮 憲廟興學宮飭祀典  
語見林學士記宗藩三國賀會備土文獻迭踵隆比齊魯其他列侯小國相繼而  
起往往有河間文翁之稱延天以來於斯為美猗欤盛矣哉我國自 洞春公霸  
西土也聘高倉管子講學三原黃門師足利白鷗洲豐浦參議學別府周徹自此  
後 嗣侯無不有師儒也先臣之敦詩書者有徒夫上之教也且昔 先世世司  
皇朝文命以輔斯民也功烈藏在天府宜永世蕃昌保譽命以禋祀于大國  
也孝孺承乏儒曹與佐二木雅真議之政府規度學宮注記祭儀申詳功令宮成  
名曰明倫館取諸孟子之言北為 先聖廟講堂居中左經籍之庫右為廚厨之  
西為齋舍廩生員內門外環以列榭講武東為劍西為槍射圍在其西旁圍為講  
武經習曲禮教天文數學之榭射圍南童生學書之舍大門外壯士習射之埒九  
子弟當業而肄者莫不備設內衛師二員統領學事詩云迨天之未陰雨徹彼桑  
土網繆脯戶君子若欲網繆國家宜莫若學豈弟君子民之父母傳曰學殖也  
不學將落教之不落其為父母也大矣畏天之威于時保之由是以事厥祖由是  
以述其職恭敬之至也所謂君子有穀詒孫子子胥樂考者 先君之謂也靡有  
不孝自求伊祜者 今侯之謂也謹記盛事且錄贊事有司姓名以垂後昆云  
元文六年辛酉春 館祭酒山縣孝孺少助謹撰

明倫館落成祭先生告文

維享保四年歲次己亥二月丁卯朔越十九日壬戌長門國大江朝臣  
吉元恭告大成至聖文宣王神位伏維夫子德體上聖道大成彝倫之  
宗師禮樂之教主父子以定君臣有維是以舟車所至莫不尊崇日月  
所照莫不親戴吉元小子上蒙 公上之恩下荷祖宗之慶叨以寡昧  
襲封一方國并二州民兼四等小子不德豈以當貴自居安逸為樂深  
恐責任之甚重而付託之難當而已若使其老幼孤寡綏撫不給苦而  
不樂憂而不歡祖宗之託無以荅焉子弟臣從才德無良內無以奉王  
事飭政治外無以備守禦固封疆 公上之責莫之塞也是以朝夕懍  
懍不敢寧居唯德可以化下唯仁可以安人小子不德不能償万分之  
一深以為慚爰謀臣相相攸城南新興學舍旁置習武之場以教子弟  
庶幾人或有自覺成德達材裨余責任以分付託之重夫述職于上垂  
統于後凡臨治為教之道不本諸夫子而何適况余先世經術專門擅  
美列朝誦鄒魯之言被諸我 大東哉於是建夫子之廟宅夫子之神  
配以四公以欽教化之表弘師資之德前年秋八月命工僱切諭年告  
成土木構締髹漆揚彩恭消令辰會耆老諸巨奉安神主祇嚴祀事式  
申虔告聖神在天道無內外庶幾降格永垂鑒臨

八江款名所圖画卷之一終

